

LA REVUO ORIENTA



エスペラント語研究雑誌「ラ・レヴオ・オリエンタ」
MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

JARO VIII
N-RO 7

第八年 第七號

JULIO
1927

目次 (ENHAVO)

噫東宮豐達君	193
羨しさ誇らしさ	194
TRA ESPERANTUJO	
海外消息及内地報道	196
POR LERNANTOJ	
エスペラント初歩補習例題講義	進藤 静太郎 202
エスペラント初等講義	204
化物屋敷〔對譯詳註〕	吉野 櫻雄 206
笑話數篇	208
新聞のエス語	森 露夫 209
守銭奴〔海外エス文藝紹介〕	平岡 昇 210
單語研究雜話	川崎 直一 212
新刊紹介	堀 眞道 213
LITERATURO	
故東宮君の追憶	横山 末治郎 214
老彫刻家の道德心〔武者小路實篤原作エス譯〕	弓山 重雄 216
アムンゼン 歡迎〔詩〕	柴田 白萩 218
EĤO KAJ REEĤO	219
淺田教授よりの書信	220
ALDONOJ	
倫敦塔〔夏目漱石原作エス譯〕	西 成甫 221
リングヴァイ・レスポンドイの譯	223

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO, TOKIO, Uŝigome, Ŝin'Ogaŭamaĉi III-14
東京市牛込區新小川町三ノ十四 財團法人 日本エスペラント學會
[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

★ 編輯 後 記 ★

★本誌臨時増刊「エスペラント初等講座」は7月27日もれなく發送しました。七月號は大分おくれまして今日になりましたまことに申譯ありません。毎日雑誌の到着をお待ち下さつてゐる皆様に大變申譯がないと思ひましたが増刊と共にさしあげたお斷り狀の通りの事情ですから御容し下さい。尙學會の實情其他については本號記事「羨しさと誇らしさ」を御覽下さい。

★雑誌の發行遅延で丁寧な御問合を下さつた方々に厚く御禮申します。★永代基金が五萬圓になつて事務員がおける様に早くなりたと思ひます。ぜひ御都合のつく方には永代基金の方へ御寄附を。(會計は年一回乃至二回誌上で發表致します。)

★雑誌未着で随分手嚴しい罵倒の言をよこされた方がありました。(本文は來月號本欄でも發表させよう)あまりひどいのでこんなに無理解な方もあるものかと思つて啞然としました。そしてあまりの事に自分を犠牲にして働いてゐる自身を顧みて云ふに云はれぬ悲哀と無念さを感じました。併し多數の會員諸君が十分了解して下さつておるにちがひないと自分を慰めてをります。

★八月號は8月20日頃にはだしたいと思ひます。九月から正規に復したいと思ひます。

日本エスペラント學會編纂

エスペラント初等講座 (定價 20 錢) (十部以上) (送料 2 錢) (二割引)

本誌の臨時増刊として發行した本書は會員各位の多大の好評をえて寧ろ單行本として發賣すべきとの要求にもとづき表紙のみを換へて内容は増刊のまゝで上記の定價で發賣することにしました。大いに御利用下さい。

告

既報の如く今後の我「學會」への入會者へは一年分以上會費前納の方に限り本書をもれなく贈呈致します。

井 上 萬 壽 藏 氏 著

エスペラント讀本

は著者の用意周到なる推敲又推敲のため荏苒今日まで發行がおくれましたが近々印刷の上發賣の豫定ですからしばらく御待ち下さい。

Internacia Radio Revuo 御購讀の方へ

當「學會」でお取次した Internacia Radio-Revuo はまだ本年に入つてから送つてきませんが當方では時々督促をだしてゐますから暫らくおまち下さい。皆様からお預りした金は先方へ送つておりませんからもし右雑誌が廢刊にでもなつたら何時でも御返金いたしますから御安心下さい。

水曜日の研究會及土曜日(第一第三)の會話練習會は八月中でも休みませんからお出で下さい。地方から上京の方も學會をお訪ね下さい

東京市牛込區 財團 日本エスペラント學會 振替口座
新小川町3の14 法人 東京11325番

LA REVUE ORIENTA

★ JARO VIII, N-RO 7

★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★

JULIO, 1927 ★

噫 東 宮 豊 達 君

有島武郎氏の「宣言」をエス譯して世界的に盛名を馳せた我熱心なる同志東宮豊達(譯)氏は月餘小田原町にて宿病療養中去年六月廿四日午前二時忽焉として逝去された。我々はこの地にあつて再び同君の温顔に接し親しく言葉を交はす日のない事を思ひ哀惜の涙にくるゝ許りである。行年僅か卅四歳。尙幾多の春秋にさみ大いになすあらんとする身を抱いて逝かれた同君の死は惜めどもつきない。殊に杖さも柱さもたのむ同君を失つた令夫人と令嬢(七歳)の御心持を拜察して何と申上げてよいかその辭に窮する次第であります。こゝに御遺族に對し厚くお悔み申し上げます。



故 東 宮 豊 達 氏

尙同君の御遺族の家事一切の整理その他の事は小田原の同志吉川貫夫(譯)氏がその任にあたられ輕井澤におられる同君の知友横山末治郎氏が同君の遺稿の整理その他の一切エス關係の處理をせらるゝ筈である(すべて遺言により)。尙遺兒エルザ嬢の教育の事に關しては故人の最も意をそゝがれた所であり故人の最も心残りの點であると考えられる。故人の知友相よつて遺兒の教育資金募集と遺著刊行

が企てられてゐるそうであるから遠からず具體化して本誌上に報道できると思ふ。

次に吉川横山兩氏の調査にかゝる同君の略歴及エスペランチストとしての經歷事蹟を記して同君を偲ぶよすがとしたい。

【故 東 宮 豊 達 君 略 歴】

★明治27年10月13日栃木縣芳賀郡七井村に出生。〔父は東宮鐵眞呂氏陸軍教官。母は琴子氏〕。東京市淺草區小島町にて成育。

★明治44年3月獨逸協會中學校卒業の上第一高等學校第三部を経て大正8年東京帝國大學醫學部を卒業。(大正6年父君逝去)

★大正8年山田貴子(譯)嬢と結婚。(當時東京市本郷區に居住。)

★大正9年より12年9月迄初め神奈川縣大磯町に次に小田原町に居住。長女エルザ嬢小田原町にて生る。

★大正12年9月大震災に遭ひ一時靜岡市に逃れ次に大分縣別府市へ移る。同年11月より翌年2月迄同市粟サナトリウムに副院長として勤務。(同地の同志杉若氏の斡旋による)。

★大正13年3月より12月迄長野縣中野町中野病院に院長として勤務。大正14年2月より15年11月迄廣島縣庄原町病院々長として勤務。

★昭和2年4月千葉縣勝山町勝山町病院を經營同月16日急病のため中止。神奈川縣小田原町に移つて靜養せしも甲斐なく6月24日逝去。

【故東宮君のエスペランチスト

としての經歷】

★東大在學中エス語を知り小坂狷二氏の講義を二回きゝ後獨逸語の獨習書にて獨學。

★大正8年小田原町へ移るに及び同志と小田原エス會を設立し宣傳及講習に努む。各種の辭典の編纂及文藝作品の翻譯を始め逝去の数日前まで筆をたゝすその短い一生に残されたこれら故人の著作物翻譯書等については本誌201頁に表で示してありますから御覽下さい。

尙本誌來月號には同君が生前 onklo, onk'lo といつて畏敬し大小事に拘らずすべて相談してゐた吉川貫夫氏の「故人追憶談」をかゝげます。尙本誌第214頁に生前親交のあつた横山氏の追憶談(エス文)あり。

羨まじさと誇らしさ

〔我「學會」の實情を申上げて會員各位の御了解を乞ふ〕

雑誌發送が大變遅延して申譯ございません。扱この際諸君の會なる我「財團法人日本エスペラント學會」の實情を申上げておくのもあながち無益でないと思ひますからこゝに申上ることをしました。

昨年小坂氏の通信に「米國にある北米エス協會は會員が少く會計が貧弱故事務員たる某嬢に高い俸給が拂へないので同嬢は外に内職をするのだそうでその結果どうしても事務が滯滞する。それで紐育の熱心な同志たる某氏の如きは宣傳の際常に自分の會へ入會をすゝめずに英國エス協會への入會や問合せを懇通する云々」とあつた。北米エス協會は我「學會」に比較して遙かに會員が少い貧弱なものである。(會費は年額4圓で毎月16頁位の雑誌をだしてゐる)。それでも兎に角いくらかの俸給を支拂つて専任の事務員をおいてゐるのである。一方英國エス協會の方は會員も多くしかも會員が會費といふものと雑誌代といふものを同一だと考へてゐないから貧弱な會報をだしてゐるにすぎない(外に International Language といふ宣傳雑誌をだしてゐる。これは非常に安く賣つてゐるが會員でも無料でもらへるわけではない)。それでも會員がかなり多い。それ故事務員も澤山おいて相當の俸給を支拂つてゐるのである。しかも猶毎年多少の缺損になるが年々その缺損は有志の手によつて補填されてゐるのである。

翻つて我「學會」をみると遺憾ながら一人の事務員もないのである。雑誌の編輯、發送、會計、庶務その他書籍の發送出版等の仕事は一切有志がその本職の餘暇をさいてする無報酬勞働によつてなされてゐるのである。

六號活字ベタ組一頁二千字を含む本文32頁廣告表紙を併せると40頁といふ内容豊富な雑誌を出してゐるエス會は世界廣しといへども我「日本エス學會」を除いては殆んどないといつてよいのである。(U. E. A. の Esperanto 誌と Heroldo de Esp., Sennacieca Revuo の外には殆んどない)。そして二千人の會員を有してゐる會に事務員の一人や二人おいてない會が我「學會」を除いてどこにあるか。こう考へてくると外國のエス會が羨ましくなつてくる。歐米の同志はエス語の性質上會費＝雑誌代とは考へてはゐない。それ故10頁や15頁の會報をだして年三圓四圓の會費をとつて

も不腹をいはない。それで有給事務員を數人おいてもやつてゆける。日本ではどうも會費＝雑誌代と考へる人が大變多い様である。勿論 Revuo Orienta の第一巻がでゝゐた時分は僅か十六頁の折たゝんだ宣傳ビラ類似の雑誌にすぎなかつた(會費はその時既に年二圓。會員數は數百に過ぎなかつた——日本のエスペランティストの總數も當時は千人餘りに過ぎなかつたろう)。それでも雑誌の貧弱さに對する苦情があまりなかつた様であつた。併し近年はどうも會費＝雑誌代といふ氣分が驚くほど濃厚になつてきた。それで最近の様に本誌が本文 32 頁の大冊になつてもまだまだ醜態をえて蜀を望む式の人がかなりある。それを思ふ毎に外國のエス會が羨しくなる。時々耳にするのであるが「キング」や「主婦之友」の様な50錢で何百頁もある雑誌と比較して Revuo Orienta は高價だといふ。こんな無茶な議論がどこにあるか。何十萬といふ部數が賣れる雑誌と僅か二千部しか印刷しない雑誌と同日に論じられようか。Revuo Orienta がやすいか高いか冷靜に考へていたゞきたい。それには最も適當な比較は英語獨逸語等の語學雑誌と比較することだ。政府の大きな底護の下にある英語。全國何十萬何百萬の中等學校生徒が一齊に學んでゐる英語。その英語の雑誌が50錢で112頁(「英語研究」)。(20錢なら44頁にあたる)あるに過ぎない。獨逸語佛蘭西語の雑誌は大抵本文 32 頁で30錢乃至35錢の割である。(「ドイッチュ」「Der Junge Deutsch」「Germania」「佛語雑誌」等)それに比して我學會の Revuo は本文 32 頁で僅か20錢(年額2圓40錢故毎月20錢)にあたるのである。しかも六號活字を一頁に二千字(一行20字で一頁百行入る)もつめこんだ雑誌が外にあるか。如何に Revuo が安いかはこの數字をみても判ると思ふ。何故こんなにやすすでできるかといふに原稿料を一文もださず事務員費を一文も拂はないからである。こゝにいふ事を考へないで大抵の人は比較にならない「キング」だとか「主婦之友」などと比較して云々する。エス書籍も一般の文藝書などと比較する人があるが日本文でかいた文藝物の植字賃はエス文の植字賃の二分の一以下にすぎない事を知らない人の机上の空論にすぎない。百萬部も賣れる(しかも前金で)一圓本と千部

賣るのに一年もかかるエス書と同一の値段にせよといふのは赤坊を一晩の中に大人にしようといふ様な暴論にすぎない。

私達はこんなことを云つて雑誌發送の遅延を pravigi しようとはしない。雑誌のおくれたのは飽くまでお詫びします。しかし不眠不休で働いてしかもこんなに遅れたのだからその邊は十分了解していたゞきたいと思ふ。一ヶ月に増刊と共に二冊だそうとしたのが無理だつたのです。それで遂々二ヶ月かゝつたのはあたり前の事だつたのです。これでも印刷所がもつ暇で七月號を擔當したS君の九州行さへなかつたら七月十日過には兩方とも届ける事ができたでせう。

事務員を澤山おいてしかも毎年缺損を補填してくれる有志のある英國エス協會の眞似はさても望みはないとしてもせめて會費＝雑誌代と考へて雑誌の發送遅延の廉で不眠不休の勞力奉仕をしてゐる人々の努力を手ぬるしと叱責するといふ様な事のない外國のエス會が羨ましい。

我々が外國のエス會を羨しいと思ふ一方我「學會」には無報酬で働いてくれる方々があることを思つて常に云ふに云はれぬ一種の誇らしさを感じてゐるのである。勿論エス語で金儲のできそうもない今日常に自分の poshono をなげだして個人雑誌を發行してゐる人は世界にかなり多いかもしれぬ。併し一國のエス普及の中心機關として立つ大きな團體に一人の事務員もなく總べての仕事が晝間役所や會社等に一日の勤めをすませ夜の餘暇を利用して無報酬で勞力を提供してくれてゐる人々によつてのみなされてゐる會が世界のどこにあらう。何と美しい犠牲であらう。一切の會計や庶務其他之に關する問合に對する返事の上に注文書籍の發送といつた雜務が山程あつて一月中の大部分は午後十二時をすぎればどうしても寢られない M 君の奮闘と妻君の援助。一頁二千字も入る 40 頁もある Revuo Orienta の編輯のため一月中遊びにもゆけない O 君の氣の毒さ。校正だけでも三回で讀む字數が二十萬字 ($2000 \times 40 \times 3 = 240000$) ときいてもゾツとする。外國からの通信の處理や M 君の地方出張中の手傳編輯の手傳等をしてくれる S 君の活動。圖書の整理や雜務の手傳をしてくれる O' 君の援助。學會の重大事件にはすべて自身出馬してくれ學會出版の書籍代等を取次店へ自宅の事務員を派遣してこつてきてくれてゐる O 理事の好意。對外方面に働く I 君の努力。これらは各地方にあつて地方會

の指導と發展に献身的の努力をさゝげられ常に陰となり日向となつて我「學會」を御聲援下さる地方會幹事の方々の御好意と共に日本否世界エスペラント界の美談と語り傳へられてよいと思ふ。我「學會」にも御存じの様に外にも理事や評議員の方々も澤山おられるが何分誰しも勤めのある身でありしかも大抵の方は多忙の方が多いので學會の事務のために特別に澤山の時間を oferi して下さる事ができないのは甚だ遺憾なことである。

我學會も上記の如く世界に誇るべき奮闘の士が多いが猶未だ手不足である。もう二、三人の献身的奮闘の士が欲しい。しかしそれよりも一人の専任事務員をおけばずつと仕事が楽になりすべての事務が圓滑に運ばれることは明かなことである。併し毎月數十圓の事務員費は今の所ではでてこない。早く基本金が五萬圓になつて有給の事務員が一人でもおける様になつてほしいものだ。

地方におられる方で「學會」の實情を御存じない方々は Revuo Orienta の發行が少しおくれると大變叱責されるが上述の様な學會の實情を十分御了解下さつて御督促は御寛大にやつていたゞきたい。

地方の方々の中には Revuo が來ないさすぐ「學會がつぶれたのではないか」と考へられる方もあると聞いた。併し我「學會」はやせてもかれても一萬圓の基金をもつた財團法人です。時たま手不足で雑誌の發送がおくれる事があつても Revuo の發行を中止して既にお拂込下さつた會費をふみたほすといふ様なことは絶対に致しません。どうぞ安心して會費をドシドシお拂込下さい。學會も八年前の創立當初はこんな口はばつたい事を云ふ自信もありませんでした。が皆様の御援助のお蔭で基礎の確實になつた今日金銭上の事では決して皆様に御迷惑をかけないといふ十二分の自信ができましたからかく申上げる次第です。唯上に述べました様に手足で時たま今度の様に雑誌の發送がおくれるといふ事がございしますが今後は再びこんな事のない様十分注意致しますから會員諸君におかせられても御安心下さつて今後とも大いに我々の會なる「學會」の發展のため只管御聲援の程お願い致します。有給事務員一人をおく事は我々の目下の念願です。それには一日も早く永代基金を五萬圓にする事です。永代基金への寄附が多くなり出版書籍から少しでも多くの益金が得られる事を望んでやみません。

海外報道

「ダンチツヒ」へ

★★第十九回萬國エス大會★★

★★★ エス文入記念繪葉書發行 ★★★

風薫る七月二十九日より初まつて八月三日まで自由市としてその名も高いダンチツヒ(Danzig)に於て第十九回萬國エスベラント大會は開催される。終つて八月四日には曾ての日のエルサレム巡禮者の如く大會参加者は波蘭のワルシャワに入りザメンホフ博士の記念碑は正式に除幕式が行はれるのである。小坂狷二氏、石井和三郎氏、淺田一氏、その他日本人の出席者も相當多數になるらしい。ダンチツヒに於ても準備おさおさ怠りなく最近の報道によれば、自由市ダンチツヒ郵便事務局はこの大會を祝する爲にエス文入の官製記念繪葉書を發行する事になつた由、20枚一組であつて裏面は通信欄、表面は中央に獨、佛、エス語で Poŝtkarto と書き、左上はダンチツヒの風景繪葉書になつて居て Johanniskirche DANZIG Preĝejo de S. Johano 等と説明がしてある。その下はエス文のみの大字で XIX UNIVERSALA KONGRESO DE ESPERANTO Danzig. 28 Julio—4 Aŭgusto 1927 と刷り込んである。

平和と學校

ジュネーヴの國際教育事務局の發起による“Paco per Lernejo”の標語による國際教育會議は4月16日より20日迄チエコスロヴァキア首府プラハに開催せられた。19ヶ國より400名の教育家が参加し、國際教育の經驗、歴史地理教科書の改訂、國際聯盟に關する知識普及 Esperanto による國際的通信の奨励等に就て討議し、豫期以上の成功を収めた。

チエコ國大統領マサリツク博士は旅行中で本會議に出席出来なかつたが、その後援者となり、外相ベネシユ博士及び外相ホヅダ氏は共に親しく出席して挨拶をなした。しかし本會議の最も特異なる點は Esp. が唯一の公用語にして、他の國語の使用さるゝ場合には Esp. にのみ通譯せられたことである。400名の参加者の中約250名は Esp. をよく了解する人々であり、残り150名の中の半分は此の會議出席のため Esp. を勉強した人々であつた。會議々長ボーヴェー博士(ジュネーヴ大學教授、國際教育事務局總理)も總ての議事を Esp. で進めた。凡ゆる國際的會議がその

唯一の會議公用語を Esp. とし、之を解しない者は國際會議に出席するの資格の無くなる日が来ることは近い將來にある。(S. Aibara)

國際無電同盟とエス語

5月11日—5月13日。瑞西のローザンヌ(Lausanne)に於て國際無電同盟(Internacia Unio de Radiofonio)の大會が開かれたが、ラヂオ・ジュネーヴ(Radio-Genève)放送所の提案による下記決議が萬場一致で通過した。

國際無電同盟は次の試みを各放送所に勧告する。即ち一週間に一度十分より十五分間遠くの聴取者に對し一週のプログラムの要點を報知し又自國の藝術、學藝、經濟上の報道をなすため定期的にエス語の放送をすること。又毎日一回、夜の放送に際してはエス語で自己の放送所を報知せしめることを希望する。と

エスペランチスト學生聯盟

佛國第二の大都市リヨン(Lyon)に於て昨年10月31日—11月1日に第一回學生エスペランチスト佛蘭西聯盟の大會が開かれた。文相エリオ(Herriot)、エス學士院長キヤール教授(Prof. Cart)等も來り會してその前途を祝福したのであつた。これは佛學生聯盟の名こそ冠しては居るが事實はこのリヨン市とトゥールーズ市(Toulouse)の學生エスベラント會により組織され、兩市より物質的の援助を受けて開催されたものであつた。これに始まつて佛蘭西各地に於る學生聯盟運動は燎原の火の如く忽ちにしてグレンブル市(Grenoble)、パリ市(Paris)、ストラスブルグ市(Strasbourg)、ボルドー市(Bordeaux)より遠くは南阿のアルジェール市(Alger)にまでこの聯盟の Sekcio が出來て活躍するに至つた。本年6月初旬 Thiers に開かれた全佛エス大會に際しては分科會を開き獨立した F. E. U. F. (Franclanda Esperantista Universitata Federacio)の大會を開催する事や會誌の發行等に就いて議したが、かゝる運動は斷じて佛國內にのみ止まるべきものでないこの見地から各國の學生聯盟と共同戦線に立つべく、國際學生エスペランチスト同盟の創設を企圖して居る。

名所舊跡エスペラントの旅

鐵道省はエス文の日本案内記“Japanlando”を率先發行するし、ジャパン・ツーリ

スト・ビューローはその機關誌「ツーリスト」にエス文の記事をのせ色々海外同志の便宜をはかつてくれる今日、海外各國のエスペランチストを集めて一旅行團を作りエス語だけを使つて風光明眉の日本案内をしたら面白からう等と考へて居たが、昨今歐洲のオーストリアから次の様な知らせに接した。それは Aŭstria Esperanto-Vojaĝa Komitato (奥太利エスペラント旅行會) の創立であつて、この會の主旨は即ち前記吾々の考へて居たのと同じ内容を持つたものなのである。即ちこの會は一面にはオーストリアのエス會である “Aŭstria Esperanto-Delegitaro” や “Esperanto-Delegitaro de Wien” 及び U. E. A. と連絡をとり、他面にはオーストリア有数の文化協會である “Wikug” (Wirtschaftlich-kulturell Gesellschaft zur Festigung internationaler Beziehungen) と結んで、海外同志を集めて Karavano (旅行團) を作り案内者を始めみんなエス語のみを用ひてオーストリア國中の名所舊跡を案内しやうと云ふのである。これは毎月一回づつ行ふ豫定であつて、已に第一回の試みは6月初旬に大成功を以つて行はれた。日数は13日でオーストリア國中を尋ね旅費も低廉であつてすべての準備は會で整へてくれる。しかも各團員は國籍こそおのおの異つておれ、同じ言葉をしやべる親しみと同志としての共鳴は忽ちに Kravano をして unu granda rondo familia にしてしまつた事と思はれる。萬國大會等に際しての一時的 Karavano は從來もあつた事であるが、の様な定期的にやる國內見物の Esperantista Karavano はこれを以て嚆矢とするであらう。尙、詳細を知りたい方は下記にお問ひ合はせを。

Aŭstria Esperanto-Vojaĝa Komitato,
Espervoko-Wikung, Wien, 1.,
Hofburg, Batthyanyi-Stiege, Aŭstrujo.

ルーマニアの中等學校

ルーマニア文部省は普通學務局 (Direkcio Generala de la Duagrada Instruado) の指令として4月12日下記の書を全國の中學校に通牒した。

「勞働大臣 Tranculaŝi を會長とするルーマニア・エスペラント協會の申請により本局は各學校當局者が生徒及び一般民衆に對しエスペラント講習會を設置せんがために Tiberiu

Morariu 教授と協力されんことを望む。」と。翻つて吾が文部當局は如何?.....

土耳其のエス運動

トルコは今まで Aidin, Angora, Konstantinoplo 等に U. E. A. の Delegito は居たがなほ個人的なエス運動であつた。やつと最近おかみから正式の免許を得て4月25日トルコ・エス協會 (Turka Esp. Asocio) が設立された。大部分はまだ講習生の事とて會員は22人のみ、しかもその國籍から云へば12ヶ國人だと云ふ。面白いのは會長がトルコ人、會計がユダヤ系スペイン人、委員が露西亞、佛蘭西、波蘭、英國人である事だ。3, Hamal Bachi, Pera, Konstantinopolo, Turkujo に居を構へ同地通過者の訪問を切望して居る。

RADIO

現在歐米各放送所エスペラント放送の中定期の放送は

北米合術國：ミネアポリス・アンド・セントポール放送所 (WCCO), 及びニューヨーク放送所 (WPCH) の二局。

南米：モンテヴィデオ放送所 (SUIAP)

奥太利：ラヂオ・ウキイン、ラヂオ・グラツ、ラヂオ・クラゲンフルト、ラヂオ・インスブルックの四放送所、但し後の二つは中繼放送。

白耳義：ブラッセル(ラヂオ・ベルジイク) 及びアントワープの二放送所。

佛蘭西：ラヂオ・パリー (CFR) 及びパリー (FPTT) の二放送所。

獨逸：ベルリン、ブレーメン、プレスラウ、ドレスデン、グライウイツ、ハムブルグ、ハノーヴェル、キイル、ケーニツヒスウステルハウゼン、ケーニツヒスベルグ、ライプチツヒの十一放送所、此の中4は中繼放送。

ユーゴースラヴィア：ザグレブ放送所。

リトヴィア：カウナス放送所。

露西亞：モスコフ(殆んど毎日)、ノヴォシビルスク、クラスノダールの三放送所。

西班牙：バルセロナ、マドリッド (EAJ₇)、マドリッド (EAJ₄) の三放送所。

瑞典：フアルン、オレブロの二放送所。

スキス：ラヂオ・ジュネーブ放送所。

太洋州：シドニー、フアーアース・ラヂオ・ステーション、トレーズ・ホール、ウエリントン、メルボルンの五放送所。

上記のものはいづれもエスペラント講習やエス語による講話又はニュース放送である。

緑星旗下の集ひ（記事参照）

【写真説明】「上圖右」大阪高工でのエス講習會。1. 米田氏。其右隣中大路氏。
 2. 藤本教授。3. 山中。4. 棚橋。5. 三橋の諸氏。「上圖左」横濱での普及講演會
 終つて。左より前列、水島、大谷、清水、西博士、間、柳田、小河原、井上、
 中列、椎橋、山崎、三石、井上(萬)、上島、進士、小河原、中村、佐々城、後
 列、宮崎、守永、山本、藤井、井上(四)、大橋の諸氏。「下圖右」小倉市の講
 習會員。「下圖左」浦和での普及講演會の後。前列右より宮澤、守隨、服部教
 授、西博士、秋田雨雀、井上、海保の諸氏。後列右端佐藤氏、後列左端湯川氏。



内地報 道

東京

5月22日 Eskulapida Klubo は館野の高層氣象臺へ遠足を催した。詳細は別項エス文遠足記及寫眞參照。★6月19日故松崎克己君墓碑建設委員會と東京エス俱樂部と聯合して追悼墓參會を赤坂區臺町51種徳寺で催した。克己君未亡人、母堂、令妹も御出でになり讀經の後各自同君の追憶談に半日を過した。(墓碑寫眞參照) ★6月18日夜



故松崎克己君墓碑

Eskulapida Klubo 例會を文化アパートに開催。丘淺次郎博士を招待して“Esperanto kaj Esperantismo”に関するエス講演をきいた。當日西、望月、川上、磯部等の諸博士を始め諸先生學生30名出席。★同夜同所隣室にて第二回東京藥學エスペランチスト懇談會を開催。Hermesa Rondeto の諸氏を始め藥學方面の同志20名參會。來賓として常にエス語で論文を発表しておられる理化學研究所の前田勤氏を招待し各自の自己紹介兼感想談や山田貞元山田武一氏等のエス演説があつて盛會裡に閉會した。因に東大醫學部藥學科教室では其以前エス講習會を開催し出席者20名。藤田、波多野兩氏之を指導された。右懇談會後も再び講習を開始した。★6月11日より淀橋角筈879の高田製藥所で山田武一氏指導の下にエス語講習開催。十數名出席。主催は京藥エス會。★7月2日18時銀座小松食堂にて甲府市へ榮轉の由里忠勝氏送別會を有志にて開催。會合者十數名。

横濱

6月4日18時日本エス學會支部主催横濱商業會議所、横濱醫師會後援で櫻木町2縣海外渡航者検査所で講演會を間泰藏氏司會の下に開催。當日の programo は「開會」——加藤孝氏(横商書記長)。「エス語の現勢」——井上萬壽藏氏。「國語を生すために」——清水勝雄氏。「通商用語としてのエス語」——佐々城佑氏。「エス語とローマ字」瀧澤又市氏。「自然科學とエス語」——西成甫氏。「無題」——柳田國男氏。當日の會衆は數十名であつたが皆熱心に傾聴してくれたのは嬉しい。横商の大谷彌十次及得田慶市博士の御盡力を謝す。(寫眞參照) ★横濱商業學校エスペラント會は4月18日より初等講習開催。6月25日終了。來學期も開催の筈。講師は同校教諭高村利藏、田中榮次郎兩氏。尙同會機關誌 Sabato を發刊した。唯野教頭は同會名譽會長になられた。尙故美澤前校長夫人(小坂氏の bopatrino) も茶話會に出席された。(寫眞參照) ★學會横濱支部主催短期講習會は6月13日から20日迄毎夜横濱エス講習所で開催。椎橋好氏指導。★佐々城佑氏指導の横濱商業會議所員の講習は6月8日終了した。(支部報)

浦和

浦和高等學校エス會では4月25日より晝休みを利用して初等講習(晝の部)。初等講習夜の部は21時半より寄宿寮に於て5月16日より。中等講習は晝休み中4月20日より開始。全會員55名。現在講習に出席してゐる人々25名。★6月18日14時より埼玉會館にてエス講演會を開く。聴衆100名餘。「挨拶」——服部實教授。「世界におけるエス語」——井上萬壽藏氏。「自然科學とエス語」——西成甫博士。「エスペラントと文學」——秋田雨雀氏。會終つて紀念撮影をなし晚餐會を開く。(寫眞參照) ★講演會と同時に埼玉圖書館にてエス展覽會を開く入場者250名。

宮城県

伊具郡丸森小學校で6月29日より初等講習會開催講師島崎捨三氏。會員は同小學校の先生方13名。(毎日曜14時)。同小學校長が大變熱心です。

神戸

毎週木曜基督教青年館でエス語社交會。月曜は神戸消費組合熊内支部で中等研究會。火曜日は同所で女子部研究會を開催してゐます。同志の出席歡迎。6月16日より開催のエス講習は出席者60名の盛況。A、B二組に頒ち7月中旬まで繼續。B組は前田健一氏 A組は大屋安雄氏指導。

大阪

大阪高等工業學校では5月30日から6月4日に亘り辯論部主催でエス語講習を催した。之は天津の同志中大路氏の懇慫により同校學生棚橋、三橋、細谷の諸君が奔走されて成立したものである。講師は大阪支部の米田徳次郎氏及西田英夫氏。出席者初め130名であつたが他の催物等のため半減したのは遺憾であつた。最終日にはザ博士十年祭を催した。式の programo は 1. 紀念撮影。2. 「開會」——棚橋一夫氏。3. 「講習顧感」——米田徳次郎氏。4. Espero. 5. 大阪商工エス研究會發會宣言——三橋皓太郎氏。6. Tagito. 7. 「エス四十年史とザ博士」——中大路政二郎氏。8. 「發會を祝する辭」——山中英男氏。9. 「閉會」——吉見豐氏。(寫眞參照)

吳

5月15日吳エス會關口春夫、布施行雄、宮堂一郎、辻堯格の各會員はマツケル自働車に綠星旗をかざして全吳市に五千枚の afisetoj を配布して大宣傳をした折柄ローマ字會の田丸博士一行にあひ大いに了解をえた。

福岡

今秋の日本エス大會の準備着々進行中の由。第一日はラムステッド公使、ロスコー氏、ヴェナブルス夫妻等外國の同志の公開講演を願ふさうである。16日晝は會議、晩より懇親會17日は遠足で場所は目下物色中との事。何れ精しい事は追つて報道する。★5月31日より6月16日迄初等講習。講師大島博士。最終日茶話會を催し藤澤村上城戸崎氏等の談話あり。其後引續いて城戸崎氏 gvidi 中。高等科は毎木曜日19時俱樂部で施行。★平岡昇氏の好意により名島へ Verda Hejmo 開設。★8月上旬タギーダヨ社主催九州エス聯盟後援で球磨川畔の同志土肥氏の家を借り綠の家を營み自炊をします。参加希望者は福岡市鳥飼1652城戸崎氏へ。

北九州

八幡市にては5月5日より10日間明治専門學校の磯部幸一教授指導の下に講習會開催。會員10名。★小倉市では6月1日より一週間勝山女學校で大場格氏指導の下に講習會開催。女子8名男子數名参加。講習後小倉エス會を男女二部に頒ち男子部は毎水曜溝口氏が gvidi し女子部は毎木曜中野氏が gvidi 中です。(寫眞參照) ★戸畑市では同期間に猪坂町錦綺寺で磯部幸一氏の指導の下に開催。9名参加。6月12日には磯部氏の御宅で例會を開きます。★戸畑エス會は高見町2の5543へ移しました。(林道治氏報)

長崎

谷口恒次氏は5月29日連絡船で渡支、廣東香港上海觀察に上られ

た。エス語の活用を望む。★5月中旬來泊中の和蘭軍艦 Sumatra 號乗組特務士官 A. M. Willemse 15日我 klubo 及高原氏宅訪問、18日午後塚本氏及三菱造船所内の同志7名同氏を軍艦に訪問 Holanda kuko を味ひながら歡談、艦内見學の後夕景歸宅。この Willemse 氏の來訪は税關旅具検査場(上陸場)における長崎エス會の揭示が役立つた譯で俱樂部が長崎税關に願書を出して許可を得て揭示したものである。他の港町のエス會の方々もぜひ同方面に御盡力されたい。★俱樂部でザ博士銅像數十箇を會員に頒つた。尙頒布御希望の方は送料共 ¥3.50 で譲る。(振替福岡23194——日本エス學會長崎支部宛の事)。

新聞雜誌とエス語

★因伯時報(5月25日)——鳥取での展覽會記事。

★カナモジシンブン(5月25日)——カナガキエス語の手引——石黒修氏。

★字部日々新聞(7月8日)——ザ博士につき記事。

★因伯時報(6月2日、3日)——國際語エスペラントに就いて——山川英吉氏。

★讀書標(四月號)(東京朝日調査部)——エスペラントの文献——由里忠勝氏。

★大阪毎日新聞(6月4日)——銀道省のエスペラント書き案内記につき記事。

★東京日々新聞(6月4日)同上。

★臺灣日々新報(五月上旬より六月上旬迄)——「エスペラント物語」——甲斐虎太氏。

★青年(7月號及8月號)——「ソコロ運動について」——乙部泉三郎氏。

★信濃毎日新聞(7月9日)——「エスペラントの集り」——(カナガキ)

★信濃萬朝報(7月6日)——「エスペラントについて」——竹内藤吉氏(?)。

同志消息と報知

★同志醫學博士豐田作太郎氏5月14日逝去さる。(1921年以來の會員)。

★由里忠勝氏——山梨縣甲府市富士見町ライジングサン石油會社へ轉。

★安田勇吉氏——今春京大卒業臺灣總督官房勤務となり臺北市御成町1の22片岡醫院方に居住。

★木崎宏氏(學會監事)——東京市日本橋區堀留警察署長となる。

日本エス學會大阪支部移轉
大阪市西成區鶴見橋通1の254 米田徳次
郎方へ轉。(南海本線萩茶屋驛西へ一丁)

松江

松江エス會はエス普及會支部と松江高校ローマ字會と共同にて山陰新聞後援の下にエス語とローマ字の資料展覽會を5月25-26兩日白瀧本町出雲ストア樓上にて開催。屋上に緑星旗を翻し大いにエス氣分を高調し天井についた緑星旗の美しさ、絶えず流れる Espero, Tagiĝo の dolĉa melodio にエス氣分益々横溢し日本のエス普及運動史は各人の注意をひき、各地で發行の諸雑誌を陳列し外國部には萬國大會や國際定期市の afişegoj や各國同志と交換したエハガキやならべエス文法を他の自然語と比較してその特徴を列挙し之を學ばねばなるまいと思はせた處で初等講習の會員募集を行つた。會期中山陰新聞池田氏の御盡力と松江キネマクラブ吉成氏の御好意により第12回日本エス大會(仙臺)でうつした filmo 全二巻を同クラブで映し多大の人氣を博した。兩日併せて600人の入場者を得た。こゝに御援助を賜つた各位

にあつく御禮申上ます。尙6月15日より前記出雲ストアにて短期講習會を開催。(大野昌一氏報)[寫眞は都合により次號へ掲載]

門司

日の出町7丁目金福寺説教所にて7月20日20-22時普及宣傳講演を致しました。大里町より大場格氏來援。中等學生十人許り聴講。今後も大いにやるつもりです。(玉水氏報)

青森

4月22-28日女子許りの講習會を催した。講師毛内氏。講員習10名尙第四回縣下エス大會は8月中旬開催の豫定なりと。

動物學上の研究を エス語で

埼玉縣師範學校におられる木場一夫氏は最近「東京高等師範學校博物學會誌第34號」へ「琉球孤島の動物相について」といふ御自身の第二回の研究報告を發表されたが、それに附加してエス語で“Pri la Faŭno de la Riu-Kiu Kurbo (Luĉu Insularo)”と云ふ題名の下に之を resumi して發表された(地圖一葉入)のはよろこびにたえないことである。

故東宮豐達氏の著譯書其他

東宮氏が短い生涯の中にエスペラントに關する澤山の著譯書を出されたがそれを次に表示すれば

A. 單行本として出版されたもの

1. 有島武郎氏の「宣言」の譯文(獨逸 Ferdinand Hirt & Sohn 社から Internacia Mondliteraturo の Volumoj 11-12 として出版さる。)

2. 芥川龍之介氏の「開化の殺人」「一塊の土」「南京のキリスト」の三短篇の譯文(獨逸 Rudolf Mosse 社の Biblioteko Tutmonda の一篇として近く出版さる。答。)

3. 「醫家用エスペラント獨習書」(吐鳳堂發行)。

4. 「燈臺守」(エス譯に和譯を附し詳註せしもの(四方堂發行)。

5. 金子洋文氏の「洗濯屋と詩人」の譯(エス研究社發行)。

B. 雑誌(Revuo Orienta, エス文藝, エスペラント)及新聞(信濃毎日, 讀賣等)で發表のもの

1. 武者小路實篤氏作「わしもしらない」及「嬰兒殺戮中の一小出來事」。

2. 正木不如丘氏作「畫家の秘密」。

3. エスペラント初歩講義。

4. エス語で世界に紹介された日本文學。

C. 特に醫學雜誌に發表したもの

1. 醫事新聞——論文抄録エス譯。羅エス和獨の解剖學名彙。

2. 實驗醫報——エス和對照醫文「診斷學及模範病歷」及エス譯藥名一覽。

3. 東京醫事新誌——論文抄録エス譯。

D. 未發表にて既に完成してある文藝物

1. 有島武郎「惜しみなく愛は奪ふ」の譯。

2. 武者小路實篤氏「神と男と女」「素戔鳴命」「廿八歳の耶蘇」の譯。

3. 「歎異鈔」の譯。

E. 辭書類

1. 大體出來上つてゐる辭典「エス和醫學辭典」(カード約13000枚)。

2. 着手した儘未完に終つた和エス辭典は「化學辭典」「植物學辭典」「動物學辭典」「藥學辭典」「數學物理學辭典」(各カード2000-4000枚)。「附記。醫學關係の作品はすべて東大の Eskulapida klubo で引受けて整理し出版所を探す。又未發表及既發表の文藝作品の翻譯は外國出版のものを除き他はすべて一まとめにして出版の計畫中の由。]

エスペラント初歩補習例題講義

第五課

進藤 静太郎

守
則

1. 音讀——小さな聲でも力強く。
2. 想像——文意を眼前に描いて。
3. 自由——例題に囚れぬ様。改作も可。

單語

- | | | | |
|-----------------------|-------------------|-----------------------|-----------------|
| 1. vilaĝo 村 | 2. hakisto 木こり | 3. segisto こびき | 4. haki 木を伐る |
| 5. hakilo 斧 | 6. segi 鋸で切る | 7. segilo 鋸 | 8. fariĝi ……に成る |
| 9. veturigisto 御者 | 10. porti 運ぶ | 11. veturilo 車 | 12. resti 留る |
| 13. ekvidi ちらっと見る | 14. laborilo 仕事道具 | 15. ekvoli 一寸……したくなる | |
| 16. provi 試みる | 17. erare 過つて | 18. ĵeti 投げる | 19. lageto 池 |
| 20. embarasiĝi こまる | 21. reaperi 再び現れる | 22. plori 泣く | |
| 23. subite 突然 | 24. aperi 現れる | 25. kialo 理由 | 26. junulo 若者 |
| 27. nei 否定する | 28. alporti 持つて来る | 29. honesteco 正直さ | |
| 30. envii 羨む | 31. reĵeti 再び投げる | 32. perforte むりに | 33. eligi 出す |
| 34. ekkrii 叫び出す | 35. redoni 返す | 36. elveni 出て来る | |
| 37. malhonestulo 不正直者 | 38. raviĝi うつとりする | 39. radio 光線 | |
| 40. disĵeti 投散す | 41. laŭdi ほめる | 42. malhonesteco 不正直さ | |

少し多いが上の單語によつて次を読む。

En unu vilaĝo loĝis du junaj laboristoj. Ili estis hakisto kaj segisto. Ilia laborejo estis la arbaro. La hakisto hakis arbojn per sia hakilo kaj la segisto segis per sia segilo; tiel ili kunlaboris por fari lignojn. Kiam lignoj estis pretaj, unu el ili fariĝis veturigisto kaj portis la lignojn al la vilaĝo per la veturilo. Iun tagon la hakisto iris kaj la segisto restis. La segisto ekvidis la laborilon de la hakisto kaj ekvolis provi la hakilon. Kvankam li estis bona segisto, tamen li ne estis bona hakisto; kaj li erare ĵetis la hakilon en la apudan lageton. Li forte embarasiĝis kaj laŭte ploris. Subite Dio aperis antaŭ li kaj al li demandis, kial li ploras. Li diris la kialon kaj petis lian helpon. Dio eniris en la lageton kaj reaperis kun ora hakilo kaj demandis lin, ĉu ĝi estas lia. Sed ĉar li estis honesta junulo, li neis. Tiam Dio ree eniris kaj alportis la feran hakilon de la hakisto. Li tre dankis Dion kaj Li laŭdis lian honestecon kaj donis al li ambaŭ hakilojn.

La hakisto revenis kaj tre enviis tion. Li reĵetis la hakilon kaj perforte eligis larmojn, kaj ekkriis al Dio, ke Li redonu la hakilon. Dio elvenis kun ora hakilo kaj demandis al li, ĉu ĝi estas lia. La malhonestulo raviĝis je la ora radio, kiun la hakilo disĵetis, kaj diris ĝin lia. Dio forte riproĉis lian malhonestecon kaj malaperis kun la hakilo kaj neniam aperis plu.

一つの村に二人の若い労働者が住んでゐました。彼等は(一人は)木こりと(他の一人は)木びきでした。彼等の仕事場は森でした。木こりは斧で樹を伐り、それを木びきが鋸でひきました; その様にして (tiel) 兩人は協働して材木を作りました。材木が出来ると彼等の内 (el) の一人が御者になつて車で村へ運ぶのでした。或日のこさ (iun tagon 時日を示す目的格) 木こりが行つて木びきが残りました。木びきは木こりの仕事道具を一寸と見て斧を一寸と試して見たくなりました。が然し彼はなる程上手な木びきでしたが、木こりは上手ではありませんでした (Kvankam, tamen)。彼は過つて斧を側の池 (lago 湖) の中へ投げ (込み) ました。彼は大變 (forte 強度に) 當惑し大聲上げて泣きました。突然神様が彼の前に現れ何故 (kial) 泣くのかと尋ねられました。彼は理由 (kial 何故を名詞化して) を云つてお助 (Lian 神様であるから大文字) を乞いました。神様は池の中に入つて早速金の斧を持つて (kun) 再び現れ彼ののであるかと尋ねました。しかし彼は正直な若者でしたから、そうじゃないと云いました。そこで (Tiam) 神様は再び (ree) 入つて、此度は (kaj) あの木こりの鐵の斧を持つて來ました。彼は神様に厚く (tre) お禮申し上げますと、神様は彼の正直さをおほめになつて兩方とも斧を下さいました。

木こりが歸つて來て (reveni) 大變羨しがりました。彼はもう一度斧を投げこんでそして無理に涙を出して神様に斧を返して下さいと叫び立てました。神様は金の斧を持つて出て來て彼のかとお尋ねになりました。この不正直者は斧が発する黄金の光に目がくれてそれは彼のだと云ひました。神様は彼の不正直さを大變お叱りになつて斧をもつてお隠れになつてもう (plu) 決して (neniam) 出ておいでになりませんでした。

ところで折角話らしい纏まつたものを習ふには習ふたが一面識もない單語が四十餘も出て來てはやり切れない。實際普通の場合新しい單語は廿五位でなければ少し學習者にこつて荷が過ぎる。しかし無理の様で無理でないのがエス語のお蔭、よく分析すると廿五近くに減る。

即よく氣を付けるに -il- の付いた語がだいぶ有る。

hakilo 斧	segilo 鋸
veturilo 車	laborilo 仕事道具

そして皆道具である。事實 -il- は道具を示す接尾字で

haki たゝき伐る	---ilo	で	斧
segi 挽くilo		鋸
veturi 乗り行く	---ilo		乗物、車
labori 働くilo		仕事道具

同様に laboristo, segisto, hakisto も講習用書第三課の -ist- により labori, segi, haki より來たものであること明瞭。

reaperi, redoni, reveni の re- は復歸を表す接頭字で ree はこれを副詞形にしたものに過ぎぬ。即意味は「復、再び」。

-ul- は

juna に付いて junulo 若者、青年 となり mal'honesta (不正直な) に付いて不正直者となる即「者」の意味を持つ接尾字である。

-ec- は

honesteco, malhonesteco 等に於ける「.....

さ」の性質を示す接尾字。

ek- は

ekvidi, ekvoli, ekkrii 等の如く vidi, voli, krii 等に瞬間、發端の意味を與へた接頭字。

dis- は分散を示す接頭字で、jeti に付いて disjeti となり投げ散らす。

-ig- は

veturi 乗物で行くを veturigisto 御者、運轉手 (乗物を行かす人) とし、el に付いて出すと成る等「.....しめる、さす」と他動的な意味を與える接尾字、それに對し -ig- は、

fari なす、作るを fariĝi 成るとし、embarasi 困らすを embarasiĝi 困る、ravi 目を奪ふを raviĝi うつとりする とする如く自動化せしむる接尾字。

更に alporti は alへと porti 運ぶの合成語であり、perforte は perを以て、forto 力の合成副詞で 力(暴力を以て)強いて、無理にさなる、elveni は el と veni。

結局廿六七に縮少し得た。(講習用書第四課に入るまでの程度を標準として)

そこで初めて第四課に入り詳細に上記の接頭接尾字を復習し、上の話に就いてこれまでの様に反復會話練習に移る(紙數の都合により省く、讀者各自にて必ず試みよ)。

〔初めから上の様な方針で講習者を苦しめた後其解決方法を與へるのも確に有利な自學的興味を起し得る方法と信ず〕

エスペラント初等講義

第八課 接頭字と接尾字 (2)

Hieraŭ vespere ĉe la kafejo¹ “Verda Stelo”, nia kutima kunsidejo,² ni havis bonvenigan³ festenon por S-ro Schmidt, kiu estas eksprezidanto⁴ de la esperanta grupo en Dresdeno, Germanujo.⁵

Kvindek samideanoj kolektiĝis⁶ por bonvenigi⁷ lin. Post duonhoro da interbabilado⁸ ni altabliĝis⁹ kaj kune vespermanĝis.

S-ro Harada, la vicprezidanto¹⁰ de nia esperanta klubo, ekstaris¹¹ kaj prezentis S-ron Schmidt kaj esprimis bonvenon al li en la nomo de nia klubo.

Poste la gasto stariĝis¹² kaj faris paroladon¹³ pri Esperanta movado en sia lando.

Kiam li ekprenis¹⁴ sur sin la postenon de l' prezidanto de l' esperanta grupo en sia urbo antaŭ tridek jaroj, laŭ lia parolo, tie troviĝis¹⁵ nur dek samideanoj. Post tiam li daŭrigis¹⁶ la propagandon de Esperanto en sia urbo kaj ankaŭ li ofte vizitadis¹⁷ najbarajn urbojn kaj vilaĝojn por verdigi¹⁸ ilin. Ofte li revenis¹⁹ hejmen en malfrua nokto pro tro longa predikado de Esperanto al antaŭjuĝemaj kontraŭstarantoj. Por propagandi nian lingvon al geknaboj li ofte donis plumingojn²⁰ kaj paperujojn,²¹ kies fabrikmanko estas “Esperanto”. Al komencantoj li ofte donis ekzempleron de “Sableroj²²” verkita de S-ino M. Hankel. Verdaj kunbatalantoj jaron post jaro plimultiĝis²³ kaj nuntempe la nombro de l' membroj estas centoble²⁴ pli granda ol en la unuaj jaroj.

Sed li nun tre maljuniĝis²⁵ kaj li jam ne havas eĉ trionon²⁶ de l' energio, kiun li havis en sia juneco. Kaj en la lasta jaro li sin eksigis de l' posteno de l' prezidanto kaj li ekvojaĝis²⁷ por tramigri la tutan mondon por viziti ĉie esperantistojn.

Post unujara travojaĝo li nun sidas inter ni, kiuj bonvenigas lin kun plenflorantaj ĉerizujoj.²⁸

En sia parolado li akcente ripetis, “Ni ĉiuj devas esti pioniroj kaj martiroj, kiuj ĉiam estis persekutitaj kaj ofte krucumitaj²⁹ de popoloj malsaĝaj. Ni ĉiuj estas nur semantoj, ni ne devas esti rikoltantoj.

Por efektiviĝi³⁰ nian finan venkon vi, japanaj samideanoj, devas ludi gravan rolon. Ne estu malpaciencaj, ne seniluziiĝu, nur laboru por nia sankta celo. Ni, eŭropaj samideanoj, atendas precipe la prosperiĝon de nia movado en via lando....” Ni desegniĝis³¹ lian portreton al iu pentristo kaj donacis ĝin al li kiel memoraĵon.³²

Je la 22-a horo la festeno fermiĝis kaj ni ĉiuj disiris kun la vortoj “Adiaŭ, ĝis la revido.”³³

【譯】 昨晚我々の例の集合所² たる喫茶店¹ ヲエルダステーロで獨逸國⁵ ドレスデン市のエスペラント會前會頭⁴ たるシュミット氏歡迎³ の宴會があつた。

五十名の同志が彼の歡迎⁷ のため集つた。⁶ 半時間の雜談⁸ の後食卓について⁹ 一緒に晚餐を共にした。

我がエスペラント倶楽部の副會長¹⁰ 原田氏が立つて¹¹ シュミット氏を紹介しクラブの名に於て彼に歓迎の意を表明した。次いで客が立つて¹² 自國のエス運動について演説¹³ をした。

彼の談によれば彼が三十年前彼の町のエスペラント會の會頭の職を自分にひきうけた¹⁴ 時には僅か十名の同志がゐたにすぎなかつた。其後彼は自分の町でエス語の宣傳をつゞけたし¹⁶ 又屢々隣の村や隣の町を訪れて¹⁷ 緑化¹⁸ につまめた。又(いゝ加減の)あて推量勝の反對論者に向つてとても長々しくエスペラントの御説教をしてゐて深夜に自宅へ歸る¹⁹ 事も往々であつた。我々の言語を少年少女に宣傳するために時々『エスペラント』といふ商標のペン軸²⁰ や紙挟み²¹ を與へたり初學者にハンケル夫人の著した『砂粒』²² といふ本を一冊やつたりした。併し彼の努力は無駄ではなかつた。緑の戰士は年と共に増加し²³ て現會員數は初期の百倍²⁴ ほどである。

併し彼も今や老年になつて²⁵ もはや彼の勢力も青年期にもつてゐた三分の一²⁶ さへもなくなつた。それで去年會頭の職を退いて各地の同志を訪れるため全世界漫遊の旅にのほつた²⁷。

彼は今や一年の漫遊の後満開の櫻樹²⁸ と共に彼を歓迎する我々の所にあるのだ。

彼は演説の中で特に力をこめて繰返して言つた『我々は皆常に馬鹿な民衆から常に迫害されたり時には磔^(さ)²⁹ にしられたりした開拓者であり殉教者でなければならぬ。我々は皆單なる種蒔き人でなければならぬ我々は收穫者であつてはならない。

我々の最後の勝利を實現する³⁰ にあたつて卿等日本の同志諸君は重大な役割を演ぜればならない。氣短かであつてはならない幻滅を感じてはならない唯我々の聖なる目的のために働くのみ。我々歐洲の同志は特に貴國における我々の運動の繁榮を期待してゐるものです。……』と。

我々は彼の肖像をある畫家に畫かせ³¹ てそれを紀念品³² として彼に贈つた。

二十二時(午後十時の事一日を24時間にわけて午前午後の稱呼をやめる)に會がとちられ皆々「さよなら(再會³³ まで)」の言葉と共に方々へ分れていつた。

接頭字

- ek- (a) 動作の發端を示す。(14, 27)
例:- ekkrii 叫び出す。
(b) 瞬間的動作を示す。(11)
例:- ekbrili チラリと閃めく。
eks- 元の, 前の。(4) 例:- eksreĝo 先王。
re- (a) 復歸を示す。(19)
例:- reveni 歸る。redoni 返す。
(b) 反覆を示す。(33)
例:- revidi 再會す。
vic- 副の, 次位の。(10) 例:- vicreĝo 副王。

接尾字

- ad- (a) 動作の繼續又は連續を示す。(8, 13)
例:- paroladi 演説す。
(b) 習慣的動作。(17)
例:- vizitadi 屢々訪問す。
(c) 名詞語根に附加して動作を示す。
例:- martelado 槌打つこと。
-aj- ある性質ある物件。(32)
例:- manĝaĵo 食物。molaĵo 柔い物。
-ej- 場所を示す。(1, 2) 例:- juĝejo 裁判所。
-er- 分子, 個體を示す。(22)
例:- monero 貨幣。fajrero 火花。

- ig- (a) 「…さなす」意。(18, 30)
例:- ruĝigi 赤くす。verdigi 緑化す。
(b) 自動詞を他動詞とする。(3, 7, 16)
例:- mortigi 殺す。 [(31)]
(c) (他動詞につけば)「…せしむ」の意。
例:- presigi 印刷さす。
-iĝ- (a) 「…さなる」意。(9, 23, 25)
例:- ruĝiĝi 赤くなる。
(b) 他動詞を自動詞とす。(6, 15)
例:- turniĝi 廻はる。
(c) 状態動詞に動作を表はさす。(12)
例:- sidiĝi 坐はる。stariĝi 立つ。
-ing- 挿入の具。(20) 例:- plumingo ペン軸。
-obl- 倍数を示す。(24) 例:- duobla 二倍の。
-on- 分數を示す。(26) 例:- triono 三分の一。
-uj- (a) 容器を示す。(21)
例:- monujo 財布。
(b) 樹木を示す。(28)
例:- pomujo 林檎樹 (= pomarbo)。
(c) 國民名につけて國名をつくる。(5)
例:- Japanujo 日本國 (= Japanlando)。
-um- 一定の意義がなく唯或る語根についてそれに多少關係のある新意義の語を作る。
(29) 例:- koloro カラー。ventumi 扇ぐ。

化 物 屋 敷

【RAKONTO DE FANTOMDOMO】

A: Jen venas via vico! Jam ĉiuj rakontis tre interesajn travivaĵojn.

B: Bone, mia estas la plej teruriga kaj vera okazintaĵo. Senartifika rakonto, malsimile al ĉiuj viaj.

C: Bela komplimento! Ni ankaŭ ne rakontis artifikaĵojn. Vi.

A: Aŭskultu, sinjoroj!

B: Estis en iu somerlibertempo. Mi vojaĝis sola tra kamparo. Iun tagon, survoje al — je Dio, mi forgesis la nomon de la vilaĝo — mi perdis la vojon en la monto, kiun oni nepre trapasas por atingi la vilaĝon. Jam estis plena nokto. La ĉielo, senstela. Kaj nenie troviĝas homa loĝejo. Kion fari? Sen manĝaĵo kaj sen noktejo. Jam elĉerpiĝis tuta energio. Tiam, subite ekaperis malhela lumo eble de farmista domo en malproksimeco.

C: Kiel ofte okazas en ĉiu rakonto.

B: Ne malhelpu mian parolon. Mi kolektis miajn fortojn, kaj fine atingis la domon, kie oni eble permesos al mi tranokti. Mi frapadis pordon, kaj aperis. Kio, vi supozas? Junulino kun diafana blankeco de vizaĝo.

【註】 Jen venas via vico. さあ君の番が来た。次は君の番だ。tra'viv'aĵo 経験して来た事。sen'artifika 飾りつ氣のない。mal'simile al..... こゝで注意しなければならないのは日本語との云ひまはしの違いである。僕は君の様に憶病じやない。Mi ne estas tiel timema kiel vi. ならばいゝが Mi ne estas tiel timema simile al vi. さ云ふは大違ひ、君は憶病じやないが僕も憶病じやない、の意となる、これは Mi ne estas timema malsimile al vi. さしなければならぬ。bela komplimento, bela さ云ふ字が反語となつて大したさ云ふ様に使はれる事がよくある。bela poŝmono! (La Rabistoj p. 7) 大した小遣ひだ、bela kompatemulo! (La Gimnazio p. 55) 大した思いやりやだよ。je Dio, この種の感嘆詞の例を

A: さあ今度は君の番だ、もうみんなが面白い経験話をしちやつたから。

B: よろしい、僕のはさてもぞつとする様な本當の事件なんだぜ。うそ偽りのない話だ君達のさはちがつて。

C: これや御挨拶だ。僕等だつて作り話はしやしないぜ、君は.....

A: 諸君、謹聴。

B: 或る夏休みの時の事だ。僕は獨りで田舎を歩きまはつて居た。或る日.....えゝさ名前忘れちまつたが或る村に行く途で山の中で道に迷つてしまつたんだ、その村に行くにはぜひこの山を越さねばならない。もう日はさつぶり暮れて居た。空に星はない。どちらを向いても人家はない。どうしたもんだらう。食糧はないし宿る所はないし.....。もう精根も盡き果てちやつたんだ。すると、突然、多分百姓屋のださ思ふんだが薄い灯が遠くに現れた。

C: よくお話にある様にね。

B: 話の邪魔しちやいけないよ。僕は元氣を振いおこして、やつとその家についたのだ。多分一夜の宿を貸してくれると思つて。僕は戸を叩いた。そして現はれたのは、君何ださ思ふ。若い女さ、色の白い透き通る様な。

二三あげるさ Dio mia, ho Dio, Ĉielo! (これはしたり)、Fulmotondro! (さあ大變)、Diablo! (チエツ畜生) 等。plena nokto, この plena も Regis tie plena silento. (ひっそり静まり返つて居た) 等に使ふ。kolektis miajn fortojn, これも kolektu viajn fortojn (La Rabistoj p. 6) しつかりしろ、等さ云ふ。kaj aperis.....kio, aperis junulino さ来る所を聞手の氣を引いて kio aperis laŭ via supozo? さやつたのである。後で出て来るが kaj aperisdivenu kion. 何が出て来たか當てて見給へ、さ云ふのも同じ。mal'piku vian langon, 舌をひつ込めろ、これは舌を鼓舞して云い難いことを云はせるさ云ふ意に piki al mi la langon, さ云ふのをもじつたのである。tren'adas sin post la knab'inoj, べんべんとして

C: Kaj tuj mi enamiĝis en ŝin, ĉu ne?

B: Malpiku vian langon! Mi ne estas tia viro, kiu ĉiam trenadas sin post la knabinoj kiel vi.

C: He, bela saluto! Ankaŭ vi iam.

B: Silentu! Vi ĉiam interrompas mian parolon. Al mia sincera peto ŝi respondis, ke ŝi ne povas akcepti fremdulojn. Tamen malgraŭ ŝia forta rifuzo mia petego venkis. Oni kondukis min en unu malpuran ĉambron. Unu paŝon en la ĉambron, kaj al mi sentiĝis mucida, malseka, aero. Lampo de malnova stilo ĵetas malhelan lumon, kaj en mallumaj anguloj subatendas io fantoma al mi ŝajnis. Eĉ mia silueto mem terurigis min. La junulino preparis liton kaj eliris kun "bonan nokton".

C: Jen komenciĝas interesa parto.

B: Eble en noktmezo ial mi vekigis. Kaj malgraŭvole mi aŭdis haltigitan ploron de virino en apuda ĉambro. Kio? En tiel malfrua nokto? Mi etendis la orelojn. Subite ĉesis la ploro. Tiam subite en mallumo mi vidis . . . diveni kion! Fantoman virinon kun haroj disliberigitaj. Mi frosttremis, kvazaŭ oni elversus sur min sitelojn da glacia akvo. Pro timo mi frapadis per la dentoj Vi tremas, C? Timemulo! Do, en venonta fojo mi rakontos plue.

C: ところで君はすぐにその女に惚れ込んだと云ふわけだれ。

B: 止し給へ。僕はいつも女の尻を追つてゐる様なそんな男じゃないんだ。君じゃあるまいし。

C: おや、これは痛み入った御挨拶、君だつていつか……

B: 黙つて。君はいつも話の腰を折るよ。僕が一生懸命に頼むのに女はよその人は泊められないと云ふんだ。が、まあ女はなかなか頑張つて居たが僕の頼みが通つた。僕は汚ない部屋に連れられて、部屋に一步足を踏み入れると徹くさいしつさりした空気がぶうんとするんだ。舊式のランプが薄暗い光を投げて隅つこの暗い所にはなんかお化けみたいなものが潜んでゐる様なのだ。自分の影法師にもぞつとした。若い女は寢床をこつてお休みなさいと云つて出て行つた。

C: いよいよ面白い所にはいるぞ。

B: そう、夜中だと思ふが、何故ともなしに眼がさめたんだ。すると思はず隣の部屋で女の忍び泣きするのが耳に入つたのだ。何だらう、こんな真夜中に。僕は聞耳を立てた。はたと泣き聲が止んだ。すると思暗闇の中に現はれたのは、君なんだと思ふ。髪を振り亂したお化の女さ。僕はぞつとした、冷水を頭からかぶせられた様に、恐しくて齒はガタガタ……君、震へてるのかい C君、憶病だな。じゃあつゞきは此の次にしやう。

女の後を追ひまはす。akcepti fremd'ulojn, fremd' は外から来て勝手がわからぬの意、mi estas tute fremda en Tokio. 僕は東京は全く不案内だ。fremd'ulo も外国人 (ali'landano) の意ばかりでなく、見知らぬ人、よその人の意に用ふ。pet'ego venkis, venki と云ふ字に注意、mi venkiĝis=mi estis venkita=mi malvenkis は私は負けたの意。sub'atendis, sub と云ふ助辭が接頭字に用ひられて秘密、隠蔽等の意を持つことがある。例 sub'aĉeti (袖の下をする)、sub'aŭskulti (立聞きす)、sub'atendi は待伏せする。silueto, 用器畫法に於る立體圖の陰翳、こゝでは影法師の事。preparis liton, 寢床の支度をする、arang'i liton とも云ふ。sterni と云ふ字があるが此は布を

一杯に擴がる様に置くと云ふ意で日本の寢床なら sterni liton と云つてもよいだらうが、外國のは lito が寢臺で敷き放しだから變にきこへる、sternas tukon sur lito 等とは云ふ。ial mi vek'igis, 何故かわからぬがひよつと眼がさめた、vekigi は眼がさめるだけで必ずしも起き上る (ellitiĝi) 必要はない。malgraŭvole 敢て欲せずと思はず。halt'ig'itan ploron, 泣かうとするのを止められた一泣き、忍び泣きの意、欠伸をかみ殺しての意に kun halt'igita oscedo と云つたのが Kabe の Patroj kaj Filoj にある。haroj dis'liber'ig'itaj, ばらばらになつた毛髪。frost'tremis, ぞつと慄へ上がる。frap'adis per la dentoj, 齒でもつてカチカチ音させた。ven'onta fojo 此の次ぎ、例へば venonta dimanĉo 此の次ぎの日曜。

笑 話 數 篇

★ EKTROVO DE AMERIKO ★

〔アメリカ發見〕

Pasaĝero, kiu eliris el la vagonaro kaj eniris en la restracion, volis parkere memori la numeron de l' vagonaro "1492-a", kaj tuj rimarkis ke Kolombo ektrovis Amerikon en la jaro 1492-a.

Post la manĝo li tuj revenis al la perono, kaj vidante ke vagonaro ekruliĝas, li kriegis.

"Konduktoro, en kiu jaro Kolombo ektrovis Amerikon?"

【譯】 汽車から降りてレストランへ入った旅客、1492 番を云ふ其汽車の番號を諸記しようと思つてコロンブスが1492年にアメリカを發見したことに氣付きました。(汽車番號とアメリカ發見の番號と同一故之で記憶しておくつもり)。

食事の後すぐプラットホームへ引返へしましたが汽車が動き出したのをみてあはてて

「車掌さん、コロンブスは何年にアメリカを發見しましたかれ。」



★ KANDELO ★

〔蠟 燭〕

Lernantino malsukcesinta en ekzameno: "Kial mi malsukcesis en la lasta ekzameno? Kvankam mi preĝis Marion pro la ekzameno lumigante kandelon?!"

Lernantino sukcesinta: "Ha, mi ankaŭ lumigis kandelojn. Grandegan sur la tablon kaj sub ĝi mi studis lecionojn ĝis la malfrua nokto."

【譯】 試験に落第した女學生:「なぜ私はこの間の試験に落つちたのでせう。私はマリヤ様に蠟燭をさましてお祈りしたのに。」

試験に及第した女學生:「アア、私も蠟燭をたててよ。大きなのを机の上へ立て、た其下で夜遅く(深夜)まで勉強しましたわ。」



★ MODELO ★

〔お 手 本〕

Patrino: "Geĉjo! Vi de antaŭ neloge eksciis mensogi. Tio estas tre malbonega ago. De nun vi ne devas mensogi."

Georgo: "Jes, mi komprenis, panjo."

Patrino: "Ha! Oni frapas la prodon. Vi iru al la pordo. Kaj se li estas tajloro, vi diru al li ke mi forestas."

【譯】 母「ゲーちゃん。お前は此の間から嘘つくことを覚えなれ。それは大變悪い事(行爲)ですよ。これから嘘をついてはなりませんよ。」
ゲオルゴ「はい、お母あさん」

母「おや、誰か戸をたたいてゐるよ。(人が来た様だ)。お前戸口へいつてごらん。そしてもし洋服屋さんだつたら留守だと云ひなさい。」



新聞のエス語

森 露 夫

Lindbergh, la plej nova heroo

Denove la homa genio triumfis; denove la moderna tekniko venkis la elementojn de la naturo; la trans-atlantika flugado de Norda Ameriko al Eŭropo, de New York al Paris, per aeroplano estas plenumita. 25-jara junulo, Charles Lindbergh, filo de sveda-amerika familio en Detroit, tute sola riskis la flugadon, kaj plene sukcesis. Li eĉ starigis novan distancan mondrekordon, flugante 5800 km. en $33\frac{1}{2}$ horoj. Centmil homoj akceptis lin en la aviadejo Le Bourget apud Paris. Estas klare, ke Usono fieras, kaj prave, pri la grandfaro de sia brava filo. La tuta mondo admiras sian plej novan heroon.

El "Heroldo de Esp."

La Mondekonomia Konferenco

Dum majo okazis en Ĝenevo la Mondekonomia Konferenco. Ĝiaj rezultoj ne estas palpeblaj, sed ĝi montris kun terura klareco la kaoson, en kiu nuntempe troviĝas la ekonomio, precipe en Eŭropo. Novaj doganaj limoj kun 11000 km. ekzistas en Eŭropo depost la grandmilito, diris la angla ĵurnalisto Layton, redaktoro de l' "Economist", 10 milionoj da senlaboruloj, kaj $2\frac{1}{4}$ miliardoj da dolaroj estas elspezataj ĉiujare por armado.

El "Verda Stelo"

Rusa Ambasadoro Atencita

La 7-an de junio en la stacidomo de Warszawa juna rusa monarkisto per revolvero atencis la rusan ambasadoron Wojkow, kiu intencis vojaĝi al Moskva. Wojkow, kiu estis vundita de ok kugloj, mortis en malsanulejo. La atencanto estas arestita.

最近の勇士リンドバーク

再び人智(人間の天才)は勝利を奏した。再び現代技術は自然の領域を冒した(自然の理法に打克つた)。北米より歐洲へ、ニューヨークよりバリーへの飛行機による大西洋横断は遂行された。廿五才の青年チャールス・リンドバークはデトロイトに住む瑞典系アメリカ人の家族の息であつて單身この横断飛行を決行し、十二分に成功したのである。彼は 33 時間半 5800 キロメートルを飛んで長距離飛行の世界的新レコードをも打ち樹てたのである。數萬の群衆はパリ近傍ルブルジエの飛行場にて彼を迎へた。アメリカ人が己れが勇敢なる子の偉業を自慢に思ふ事は明であるし、又宜なる事である。全世界は擧げてこの最近の勇士を稱揚する。

世界經濟會議

五月ジュネーヴに於て世界經濟會議が開催された。その結果は感知し得べからざる事であるが、この會議が恐しきまで明確に示してくれたものは經濟特に歐洲のそれが現在陷つて居るその混亂状態であつた。11000 キロメートルにわたる税關域が大戰後の歐洲に存し、失業者は千萬人、二十二億五千弗の金は毎年軍備の爲に費されて居る、さ英國の新聞記者、エコノミスト誌の主筆レイトン氏は演説した。

露西亞大使暗殺さる

6 月 7 日ワルシャワ停車場に於て若い露西亞の君主主義者は短銃を以て露大使ウオイコフを暗殺した。ウオイコフ氏はモスクヴァに向け出發せんとして居る所であつて、八發の銃丸に傷き病院に於て死去した。暗殺者は逮捕された。

守 錢 奴

【泰西エス文藝の渉獵】

平 岡 昇

La Avarulo (幣嚮家) は Molière の原作。Sam. Meyer のエス譯。Molière はかの太陽王ルイ十四世時代に出で、Racine, Corneille と共に十七世紀の佛蘭西劇空を快翔した古典劇の大立物。温和で寛大な氣稟、常に目醒めた熱し易い感受性、正確で誤りを知らない良識、それと物象の奥底に徹しなければ止まぬ藝術家的好奇心、之等の稀な能力を具へたこの偉大な魂の靜觀者は巧妙に粉飾された表面を持つ人間性の深奥に注意深く潜んでゐる痴情を遺憾なく摘出して、Bossuet の所謂「物見高い人間、自らの過誤に依つて、自らが、見る見世物の一つとなる人間」に永遠に苦い笑ひ方を教へ、Shakespeare と共に、何れも三十有餘の劇作の中に、凡ゆる視野と相の下に觀められた一團の不朽の人間の姿を刻みつけた。彼の作には先づ Misanthrope (世間嫌ひ) Tartuffe, Don Juan, le Bourgeois, Gentilhomme など多くの傑作があるがエス譯されたものは Don Juan, Amfitriono, La Avarulo, Georgo Dandin.

金と人の心。古來この問題を捕へた作家は多い。がそれも社會相や時代相の相違によつて種々な色彩を帯びて来る。故に「守錢奴」に於るアルパゴンとはバルザックやオクタヴ・ミルボア等が畫いた拜金宗徒、ことに近代的分子を加へたものとは違つてゐるが、一種の偏執狂の一態として興味がある。ことに皮肉にもこの偏執狂の老爺の心の中で金と戀とが鎬を削るのである。La Avarulo には Molière の Molière たる所が明らかには見えないが、彼の最も populara な作の一つ。

金持で恐ろしくけちん坊の男やもめの老爺アルパゴンは若者クレアントと娘エリーズの父親である。ところでアルパゴン爺さんの幣嚮振りは一通りではないので、例へば執事や澤山の召使、それに車や數頭の馬を持つてゐる程富裕なのにも拘らず、召使の着物はぼろぼろになるまで着せ、食事は辛うじて生きて行ける程度のもので我慢をさせ、馬は營養不良でひよひよになるまで虐待し、二人の子供にも人並の生活が出来ない程ひどい儉約を壓制する云ふ、眼中たゞ金のための厄介な代物である。ところがもつと悪い事は、爺さんは年甲斐もなく若い美しいマリアンヌを戀してゐることだ。その上間が悪いことにマリアンヌを戀してゐるのは爺さん許りでなく息子の

クレアントもさうである。又一方娘のエリーズは溺れかゝつた時助けてもらつた素性の知れぬ若者のヴァレエルと戀仲であるが、とても尋常な手段では結婚が出来ないと思つて、ヴァレエルは先づアルパゴン爺さんの心を得る爲に、極端にけちん坊の執事となつて住み込む。そして「人は食はんがために生きず、生きんが爲に食ふのみ」てな事を云つて爺さんを喜ばす。爺さんはマリアンヌは可愛い、が困つたことに相手が貧乏な爲に持參金が來ないので氣に病んでゐる。が間もなく、貧乏人だから家事を思ひ通りしまつて呉れるに違ひないと思へて持參金のことは先づ諦めた。がその代り娘のエリーズを持參金無しでさ云ふ約束で田舎紳士のアンスルム老人に賣りつけることにした。之でさし引き損得なしと云ふよりもマリアンヌの可愛さだけまうけ物である。所が爺さんは我利我利の高利貸丈金はうなる程持つてゐる。丁度この頃一萬エキューの金貨を手箱に入れて庭の中に隠してゐて時々出して中實をしらべては獨り悦に入つてゐる。勿論取入には最大の注意を拂ひ、自分以外の家人には絶対に知られぬやうにしてゐる。だから爺さんは二六時中戀以上にこの金の事が氣に懸るので頭の禿が一入輝きを増すも道理である。

或る日クレアントの召使のラ・フレーシェが金を盗んだと疑はれて、爺さんから散々しらべ上げられるが、その形跡がない。がさに角危険人物とあつて無りやりに逐ん出してさふ。やがては入つて來た息子と娘にさうさうマリアンヌとの結婚の話を持出す。息子はめまいがすると云つてにげ出す。爺さんは尙も呆然としてゐる娘の前でエリーズにはアンスルム老を、又クレアントには金持の寡婦を宛てがふ事にしたと得々と話し出す。そこで娘と息子は策略上表面は爺さんと妥協する。その中息子が金の必要にせまられて恐ろしい高利の借金をすることに決心してその高利貸に會ひに行くさ、それが親爺なので大變な口喧嘩になつたりする。がやがてマリアンヌを招待する。仲人の甘言に他愛もなくいゝ氣になつて會つてみると、成績があんまりかんばしくない様にみえる。がそれでも一時丸めこめられる。が終にはクレアントが戀を白狀して親子の間に最後の通牒が發せられる。ところがその時お拂箱になつた仕返の積りで召使の

フレーシュが手箱を盗んで来てクレアントに渡す。爺さんは氣狂の様にわめき立てる。誰でも皆盜人にして了解。巡查を呼んで来て、丁度來合せた料理番兼御者のジャックを早速犯人にする。ジャックはかつてヴァレエルが爺さんに氣に入る爲にやつた物凄く格闘振りに犠牲になつた事があるのでこの時許りヴァレエルを犯人だと云ふ。ヴァレエルがさつつかまる。面喰つたヴァレエルは大事露顯と早合點して、エリーズとの戀に就て長々云ひ譯をする。初めは話がちぐはぐで變な問答が続いた後初めてそれと分るさ、又々爺さんはかにかんに怒り出す。そこにアンスルム、マリアンヌ、エリーズなんぞが出て来て爺さんの氣を和げようとする。色々話してゐる内に、アンスルムが幼い時に分れ分れになつたマリアンヌとヴァレエルの父親である事が分る。がクレアントは機をうまく捕へて、爺さんに金をすつかり元通りにしてみせるならマリアンヌとの結婚とヴァレエルとエリーズの結婚を許すと云ふ約束の下に、手箱を持出す。そこで爺さんは戀を諦めて金箱を抱く。尤も結婚の費用を抜からずアンスルムに轉嫁した手際だけはさすがに爺さんらしい腕前であつた。

最初に、マリアンヌ招待の準備の爲に人々に持役を與へ、料理人兼御者のジャック (Jakobo en esperanto) に命ずる所。

Akto III. Sceno V.

Harpagono, Valero, Jakobo

Harpagono. Valero, helpu min pri tio ĉi. Nu, Jakobo, proksimiĝu; mi lasis vin por la fino.

Jakobo. Ĉu al via veturigisto, Sinjoro, aŭ al via kuiristo, vi deziras paroli, ĉar mi estas ambaŭ.

Harpagono. Al Ambaŭ.

Jakobo. Sed al kiu komence?

Harpagono. Al la kuiristo.

Jakobo. Volu do atendi, mi petas.

(Jakobo formetas sian livreon de kondukisto kaj aperas vestita kiel kuiristo.)

Harpagono. Kia ceremonio estas tio.

Jakobo. Vi povas paroli.

Harpagono. Jakobo, mi invitas gastojn al vespermangŝo hodiaŭ.

Jakobo (flanken). Mirindaĵo!

Harpagono. Diru iom; ĉu vi regaĵos nin bone?

Jakobo. Jes, se vi donos al mi multe da mono.

Harpagono. Al la diablo! Ĉiam monon! Ŝajnas kvazaŭ ili nenion pli havas por diri ol: monon! monon! monon! Ili ĉiam havas tiun ĉi vorton en buŝo, monon! Ĉiam paroli pri mono. Ĝi estas ilia granda batalilo, mono!

.....こゝで Valero が口を出して盛に Harpagono 爺さんの氣に入りさうな事を並べる。Jakobo が少し馳走をしよう云ふので Harpagono が以ての外だと反對する。するさそれに調子を合はせる爲に Valero が心にもない事を云ひ出す。

Valero. Eksciu, Jakobo, vi kaj viaj similaj, tablo kovrita per troa viando estas insido; por montri sin amiko de siaj gastoj, estas bezone, ke la modereco regu ĉe la mangŝo, kaj, laŭ la diro de antikva saĝulo: Oni devas mangŝi por vivi ke ne vivi por mangŝi.

Harpagono. Ha! Kiel bone dirita estas tio ĉi! Proksimiĝu por ke mi vin kisu pro tiu parolo. Ĝi estas la plej bela sentenco, kiun mi iam aŭdis: Oni devas vivi por mangŝi, kaj ne mangŝi por vi..... Ne, ne estas tiel. Kiel vi diras?

Valero. Ke oni devas mangŝi por vivi, kaj ne vivi por mangŝi.

Harpagono, (al Jakobo). Jes; ĉu vi aŭdas? (al Valero) Kiu eminenta homo diris tion ĉi?

Valero. Mi jam ne memoras lian nomon.

Harpagono. Memoru skribi por mi tiujn vortojn; mi volas, ke oni ilin gravuru per oraj literoj sur la kameno de mia mangŝosalono.

次は金箱を盗まれた Harpagono の驚駭。

Akto IV. Sceno VII.

Harpagono (kriante en la ĝardeno.)

Ŝtelisto! Ŝtelisto! Oni mortigas! buĉas! Justeco! Justa ĉielo! Mi pereis, mi estas mortigita; oni tranĉis al mi la gorgon, oni forrabis de mi mian monon. Kiu li povas esti? Kien li pasis? Kie li estas? Kie li sin kaŝas? Kion mi faros por trovi lin? Kien kuri? Kien ne kuri? Ĉu li ne estas tie? Ĉu ne tie ĉi? Kiu estas? Arestu! (al si mem, prenante al si la brakon) Redonu mian monon, kanajlo..... Ha! Ĝi estas mi..... Mia animo estas konfuzita kaj mi ne scias, kie mi staras, kiu mi estas, kaj kion mi faras. Ho, ve! mia mizera mono, mia mizera mono, mia kara amiko, oni senigis min je vi; kaj ĉar oni vin forprenis de mi, mi perdis mian subtenon, mian konsolon, mian ĝojon; ĉio estas finita por mi, kaj mi nenion plu havas por fari en la mondo! Sen vi mi ne povas vivi. Ĉio estas perdita; mi ne vivas plu, mi mortas, mi estas mortinta, mi estas enterigita. Ĉu ne estas iu, kiu volos revivigi min, redonante al mi mian monon aŭ dirante, kiu ĝin prenis? He! Kion vi diras? Estas neniu. Kiu ajn tion faris, li devas esti tre zorge observinta la horon, kaj elektinta ĝuste la tempon, kiam mi parolis kun mia perfida filo. Ni eliru! Mi volas venigi la ĵugistaron kaj turmentigi mian tutan domon, servistinojn, lakeojn, filon, filinon kaj ankaŭ min.

單語研究雜話

[7]

川崎直一

Tiun ĉi artikolon mi dediĉas al S-ro R. de Saussure.

31. heziti.

Literatura Almanako 1909 に例の René de Saussure が enkonduko de novaj radikvortoj について書いている。

“.....La enkonduko de novaj radikvortoj en la lingvon tute ne signifas, ke oni volas reformi ĝin, sed nur ke la lingvo kreskas kaj paŝon post paŝo alproksimiĝas al natura lingvo vivanta. La enkonduko de nova radikvorto estas pravigita en la jenaj okazoj:

1^e por esprimi ideon simplan per vorto ne ankoraŭ trovebla en la Universala Vortaro de Zamenhof. Tiu ĉi okazo fariĝas ĉiutage pli malofta, ĉar multaj aŭtoroj jam enkonduki^s novajn vortojn en la literaturon Esperantan.

2^e por fari distingon inter la diversaj sencoj de unu sama vorto. Ekzemple, enkondukante la radikon *hezit* — flanke de *ŝancel* —, oni ne forigas tiun ĉi lastan vorton; oni nur malpligrandigas la amplekson de ĝia senco, aŭ per aliaj vortoj, oni donas al la radiko *ŝancel* — senco malpli elastan kaj la mankon tiel kreitan oni plenigas per la nova radiko *hezit* —. Ĉiuj novaj vortoj teknikaj apartenas al tiu klaso.

3^e por mallongigi la kunmetitajn vortojn regule formitajn, kiam ili estas aŭ tro longaj aŭ tro aprioriaj. Ekzemple *hospitalo* anstataŭ *malsanulejo*. Oni scias, ekzistas ĉiam kontraŭeco inter *reguleco* kaj *internacieco*: la vortoj regule kunmetitaj estas plej ofte neinternaciaj dum la vortoj internaciaj estas malregule devenigitaj. Nur la praktiko povas montri, kiam oni povas konservi regulecon kaj oni devas preferi internaciecon. Ekzemple oni diras: *honestaj* *malhonestaj* (regule kaj internacie); *dekstra*, *maldekstra* (regule); *jes*, *ne* (internacie).

Kie do estas la limo inter la uzo kaj la neuzo de l' prefikso *mal*? Tia limo ne estas fiksa: Ĝi evolucios kun la lingvo, kiu iom post iom fariĝas pli aposteriora. Jam nur en la teknikaj vortoj militistaj oni proponas novajn vortojn anstataŭ *maldekstre*, *malantaŭe*, k.t.p. La kaŭzo estas, ke la ordonoj: *dekstren*, *maldekstren*, *antaŭe*, *malantaŭe*, estas malfacile distingeblaj. Oni do verŝajne enkondukos per

la praktiko kelkajn novajn radikvortojn: *lefe* = *maldekstre*; *postere* = *malantaŭe*. Aliflanke oni ne devas forlasi la regulecon senkaŭze kaj supersuti la lingvon per novaj vortoj. La regulaj vortoj *malbona*, *malgranda*, *malvarma*, estas tute taŭgaj almenaŭ en la nuna stato de la lingvo.

4^e por ŝanĝi la nunan senco de simpla vorto malbone elektita; la nova vorto uzata estas neologismo, dum la malnova fariĝas arkaismo. Ekzemple oni povas enkonduki la radikon *minto*, kiu anstataŭas la nunan *mento*.

Resume, lingvo internacia povas esti vivnaskita, nur se ekzistas konstanta harmonio inter la stato de ĝia disvolviĝo kaj la amplekso de ĝia vortaro.....”

Saussure! 彼は理論の人である。1907 年 Ido が Esperanto plibonigita なる叛逆の旗をひるがえした時、多くの Esp-istoj は “今こんな reformo をするのは propagando の上に非常な悪影響を及ぼす” として “Fideleco al Fundamento!” を熱狂的に叫んだのみで Ido のそのいわゆる “Scienca derivado de vortoj” の前には頭があがらなかった。

この時、奮然起つたのは彼であつた。彼は “Ido の科學的 derivado なるものは實は何ら科學的でなく、たゞ不必要に事柄を複雑にしたに過ぎない” と Ido の理論の誤りを徹底的に證明した。

このような功勞者である彼も、その後彼の penetranta analizemo が却つて災をして、自分で國際語をいくつもつくるようになった。(Antido, Esperantido, Nov-Esperanto 等) ついには Esperantista Akademio から除名されるに至つた。

しかし彼の lingvaj teorioj は實に今日でも我々 Esp-istoj にとつて極めて有益なものが多い、こゝにあげたのはその一つに過ぎない。

Internaciaj lingvoj をいくつもつくるさうようなつまらない遊戲を止めて Esperanto の理論の方面に活動する事を私は彼に希望したい。もし彼にして再び邪道より立ち返つたならば、それは彼一人の利益に止まらず、國際語主義者全體の喜び、否國際語を要求してゐる全人類の幸福である。

新 刊 紹 介

【BIBLIOGRAFIO】

堀 眞 道

★JAPANLANDO, gvidlibro por Japanlando, 13×9 c.m., p. 112, eld. de Japana Ministrejo de Ŝtat-fervoj, trad. de la redakcio de la Japana E-ta Instituto.

Oportuna gvidlibro kun 37 ilustraĵoj kaj 9 landkartoj. Pri detale vidu paĝojn 176-an kaj 188-an de la junia numero de tiu ĉi gazeto. E-istoj en aliaj landoj povas akiri ĝin senpage, petante al la pasaĝera oficejo en la Tranŝika Fako de l' Fervoja Ministrejo en Tokio.

六月號會話欄(176頁)及ĉo欄(188頁)にも出て居たが學會委員の努力と井上君の盡力によつて生れた鐵道省發行の「日本案内記」のエス譯である。目下のところ非賣品で海外よりの旅行者に主に頼たれるので皆さんには御頼ちするのが困難ですが近き將來に於て何處かで翻刻せられて普く國內に發賣頒布されるに至ることを思ひます。

★GREKAJ PAPIRUSOJ (Noj. 11-12 de Biblioteko Tutmonda), kompilita kaj tradukita de D-ro. Julius Penndorf, 11×17 c.m., p. 112, eld. de Rudolf Mosse 1927.

B. T. の第十一及十二編で古代希臘のパヒルスの研究とその紹介である。パヒルスの發見及研究からそれに現はれた史料風俗傳説等をまとめた貴重な一編である。

★LA VOJAĜOJ KAJ AVENTUROJ DE BARONO MUNCHHAUSEN (Noj. 13-14 de B. T.), el la angla trad. de J. D. Applebaum, 13×19 c.m., p. 88, eld. de R. M. 1927.

B. T. の第十三及十四編で有名な冒險談のエス譯で此が原本が英語であるか獨逸語であるかは大いに論争されて居るさうであるが譯者は英語説を確信して英語のテキストに依つたさうである。文學的の價值は別として各國語に譯されて居る有名な本として叢書に加へる價值はあらう。

★LA INDIVIDUALISMA SOCIALISMO, de D-ro A. R. Proschowsky; 10×13 c.m., p. 16, eld. de J. Estour, Rasa Virina Klubo, 1 bis. Rue Contures Saint-Gervais, Paris-IIIe, 1927.

熱烈な革命思想家で丁抹社會黨實行委員であつた著者が“Krio el Nice”といふ雜誌に發表したもので一言一句も無駄のない全人類への警句である。

★EL ESPERANTO, propaganda broŝuro de E-ta Societo de Kuba, 21×28 c.m., p. 8, eld. de Sociedad Cubana para la propagacion del E-to, Aparatado 1924-Habana, Kuba Respubliko, 1927.

キューバのエス語會で出來たエス語宣傳パンフレットである。煙草で御馴染のハバナ、妙な郵便切手で記憶に残るキューバを聞くだけでもなつかしい。

★富山縣下エスペラント運動史。富山縣下エスペラント運動史四六判24頁謄寫版刷。郵券6錢封入申込の事。富山市西堤町10番地富山エス俱樂部發行。富山縣下におけるエス運動の發祥より最近までの運動を年次順に記録したものである。

各地方會でこういつた運動記録が謄寫版刷にでもなつて各地方會が相互に交換したり當學會の文庫へ寄贈下さるなら我國エス運動史の貴重な文献となるであらう。

★VORTOJ DE PROF. TH. CART, eld. de “Esperantista Voĉo”, Jaslo, Polujo, 13×19 c.m., p. 140, presita sur luksaj paperoj, prez. ½ dolaro aŭ 2.5 sv. fr.

ポーランドのGrenkamp氏とR. de Lajarte氏等が熱心に奔走して現在 Esperantista Akademioの會頭たるCart教授のこれ迄にLingvo Internacia誌其他へ發表したエス語に關する澤山の artikolojを蒐集分類したものである。エスペラントを眞に愛するの士は本書に蒐められたCart教授の言に耳を傾けるべきである。巴里滞在中のGrenkamp氏と小坂氏と會見して種々これについても話されたそうだ。いづれ本書は學會でも取次ぎたいと思つてゐる。卷頭のGrenkamp氏のCart教授への公開狀の一節にCart教授を賞めた一節に“El la posteuloj de l' Majstro vi ja estas la plej firma, la plej fidela, kiun ŝancelis nenia bato, nenia ventego! Dum pli ol dudek jaroj vi senhalte batalis ne demandante vin, ĉu vi rikoltos laŭdojn kaj aplaŭdojn, sed opiniante, ke vi havas la devon diri tion, kio al vi ŝajnas esti la Vero!”とあり。Idoの難に際して“Ni fosu nian sulkon”と叫んだのも同教授である。

Rememoro pri Sinjoro Tooguu

Suejiroo Furusaŭa.

La 24-an de Junio, 1927, unu brila stelo malaperis de l' ĉielo de nia Esperantujo. La stelo komence ekaperis en iu anguleto de la orienta ĉielo, sed post nelonge ĝia ĉiampliiganta lumo tiris eĉ atenton de okcidentaj loĝantoj. Kian grandan frapon ili ricevos ĉe l' koro kaj kian grandan bedaŭron havos je la sciigo de l' malapero de tiu ĉi stelo!

S-ro Tojosato Tooguu finis sian vivon de tridektri jaroj je la dua horo en la mateno de l' suprecitita tago en Odaŭara, marborda urbeto en Kanagaŭa-gubernio, 50-mejlojn malproksima de Tokio. Ĉe lia mortlito ĉeestis liaj amataj edzino kaj filineto, bopatrino, fratino, samideano-amiko la plej intima al li kaj kelkaj parencoj, al kiuj li kviete diris eternan adiaŭon jam kelkajn horojn antaŭe.

Al la okuloj de S-ro Tooguu la homvivo ne vidiĝis kiel benata. Kiam li estis kolegiano, li jam sentis sin sola en la hejmo inter siaj propraj gepatroj kaj gefratoj. Sed la vivo ankoraŭ ne estis tute dezerta kaj neeltenebla por li, ĝis li ricevis grandan baton en la koro dum sia universitata vivo kiel medicina studento per la studo de mendelismo, kiu sciigis al li, ke nenio alia ol reaperanto de sia prapatro estas li, kiun li ĝis tiam pensis esti li mem. Ne ekzistas tie spirito, karaktero, cerbo kaj korpo, kiujn li povas nomi siajn proprajn, sed nur ekzistas tiuj, kiuj jam apartenis al siaj prapatroj, kaj li estas ankoraŭ regata de l' prapatroj, ne de si mem. Li malfacile preterpasis tiun ĉi fakton, kiun multaj eĉ ne rimarkas. Li turnis sian rigardon eksteren de mallumega interno por serĉi ĉu tie troviĝus iu, kiu lin savus. Kion li trovis? Malbenatan sistemon de socio, kiu laŭ lia opinio, estas la kreitaĵo de malsaĝaj homoj, el kiuj la plej granda parto de l' tuta homaro konsistas! Kaj premate sub la radoj de tiu sistemo de socio la plej multaj ĝemegadas. Poste li mem trovis sin inter tiuj ĝemegantoj.

Ĉu li do perdis tutan esperon en la vivo kaj en la mondo? Ne! Jen estis Esperanto, unu fraŭlino kaj "*Nova Vilaĝo*". Esperanto donis al li esperon kaj ankaŭ laboron, per kiu li povas partopreni en la sankta afero efektivigi "la belan sonĝon de l' homaro. Post edziĝo kun la fraŭlino li trovis bruston, el kiu senhalte kaj senfine elfluas fonto de amo, kiu ĝis lia lasta momento neniam lin sojfigis. Kaj kion donis al li "*Nova Vilaĝo*," movado celanta reformiĝon de socio per paca metodo fondita de S-ro Muŝakooĵi? Li tie vidis la praktikan metodon, kiu iam venigos socion ideale organizatan.

Li nun havis esperon, laboron kaj bruston por ripozi. Sed efektiva vivo ĉiutaga lin ne favoris. Li jam ricevis diplomon de kuracisto de interna malsano, sed mankis al li kapitalo malfermi propran malsanulejon, kaj li devis serĉi oficon en hospitalo. Se li devus nutri nun sian propran familon—edzinon kaj filineton li preferus loĝi en granda urbo, kie li povas

havi necesajojn por vivi komforte. Tamen li devis ankaŭ finance helpi siajn patrinon kaj gefratojn lasitajn de sia mortinta patro. Estas neeble al mi senlarne pensi pri li, kiu transloĝis de loko al loko ĉiam en malproksima angulo de provinco postkurante post la bezonata sumo da salajro, kiun li malfacile ricevis en hospitalo en granda urbo. Ĉar jen provincanoj ne komprenis lian valoron kiel kuraciston, jen posedanto de hospitalo lin kolerigis pro sia kapitalista sintenado al li kaj al pacientaro, li nenie trovis seĝon komfortan, sur kiu li povas longe sidi. Fine li havis hospitalon, kiun li povis nomi sian propran, sed, ho ve, tiam li jam ricevis ĉe l' koro difektiĝon, kiu rezultis lian morton baldaŭ poste.

En tia cirkonstancoj li laboris—vere senlace kaj senĉese laboris por kaj per Esperanto. En 1924 en Germanujo aperis lia unua tradukaĵo, ankaŭ la unua esperanta tradukaĵo de japano eldonita en Eŭropo, "Deklaracio," kiu famigis lin inter samideanoj ne nur en patrujo sed ankaŭ en alilandoj. Li, la scienculo kaj samtempe amanto de literaturo, intencis traduki literaturajojn kaj sciencajn verkojn de japanlingvo en Esperanton por sendi orientajn juvelojn al Okcidento, ne, al la tuta mondo kaj ilin fari la posedadoj de l' tuthomaro. Tro frue venis lia morto. Li ne finis eĉ dekonon de l' laboro, kiun li intencis fari. Dekkelkaj tradukaĵoj de japana literaturo, Esperanta kurso por kuracistoj, kelkcent paĝoj da referatoj de medicinaj traktatoj kaj aliaj, medicina vortaro kun dudek mil vortoj preskaŭ kompletigita kaj kelkaj vortaroj ĉefe sciencaj nefinitaj estis lia tuta laboro en Esperanto dum sep jaroj.

Li, fidela kaj protektema al la familio, bonkora al amikoj, helpema al samideanoj, fidinda al pacientoj kaj sinceraj al ĉiuj, jam mortis. Tamen, mi kredas, lia animo vivas kaj vivos por eterne inter ni, samideanoj, donate al ni ĉiam freŝan kuraĝon por la afero komuna. Ni, amikoj kaj samideanoj liaj, lin bedaŭras kun malĝojo en koro, admiras kun larmoj en okuloj. Pacon al lia cindro!

S-ro Tojosato Tooguu naskiĝis en 13-a de oktobro, 1894, kaj mortis en 24-a, junio, 1927.

Liaj verkoj esperantaj

A. eldonitaj (tradukaĵoj de jap. literaturajoj)

1. "Deklaracio" d. T. Ariŝima. (eld. de F. Hirt & Sohn.)
2. Tri noveletoj de R. Akutagaŭa (eldonota de Rudolf Mosse.)
3. "Lavisto kaj Poeto" de J. Kaneko.
4. "Lanternisto" kun jap. traduko kaj komentario.
5. Memlernolibro de Esperanto por medicinistoj.

B. publikigitaj en gazetoj kaj ĵurnaloj (tradukoj de literaturo)

1. "Eĉ mi tion ne scias", kaj "Unu okazeto ĉe Teknotomio" de S. Muŝakooĵi.

2. "Sekreto de Pentristo" de F. Masaki.

C. tradukaĵoj ankoraŭ nepublikigitaj.

1. "Senbedaŭre amo rabas" de T. Ariŝima.
2. "Jesuo Dudekokjara", "Dio, Viro kaj Virino", "Susanoo-no-Mikoto" de S. Muŝakooĵi.
3. "Tan'isoo" (trad. de budaisma verko.)

D. Laŭ la peto de l' kelkaj medicinaj gazetoj li ĉiam tradukis aŭ skribis referatojn en Esperanto.

E. Li intencis verki diversajn vortarojn teknikajn Esperantajn. Sed ĉiuj estas ankoraŭ ne kompletaj.

1. Medicina Vortaro (preskaŭ kompleta).
2. Ĥemia Vortaro, Botanika Vortaro, Zoologia Vortaro, Farmacia Vortaro, Matematika kaj Fizika Vortaro.

Moraleco de Maljuna Skulptisto

de Saneacu Muŝakōji, el jap. tradukis Shigeo Yumiyama.

ANTAŬ juna modelknabino maljuna skulptisto staras kaj laboras. La laboraĵo estas preskaŭ finita.

La maljuna skulptisto rigardis sian laboraĵon. Kaj li ekridetis ŝajne de kontenteco de l' koro. Dum la rigardado iom post iom lin kaptis nerifuzebila amo al la laboraĵo. Kaj samtempe per la laboraĵo en li naskiĝis amo al la modelknabino.

Aŭ inverse, amo al la modelknabino naskis al li la amon al la laboraĵo.

Li estas 68-jara; kaj li pensas ke la nunfoja modelknabino estas la plej bela modelo el ĉiuj, kiujn li dungis ĝis nun dum sia longa skulptista vivo. Preskaŭ ĉiam li admiris la belecon de siaj modeloj, kiam li laboradis antaŭ ili. Tamen ĉifoje plej forte li estis ravita de l' belegeco de tiu modelknabino.

Kun longa rigardado li sentis pli kaj pli absolutan perfektecon kaj mirindan belecon en ŝia korpo. Ĝin formas nur kunligiĝoj de neatentindaj kurblinioj aŭ rilato inter kavoj kaj elstaroj, en kiuj tamen li trovis senliman guston kaj estis tute absorbita. Kaj tiu senlima gusto elnaĝigas ian graciecon neordinaran, ĉu en iu parto, ĉu sur la tutaĵo. Perfektan virinon li povis renkonti la unuan fojon en sia vivo per la korpo de tiu ĉi modelo.

Li trarigardis la skulptaĵon kaj fariĝis tute kontenta kaj li denove rigardis la modelknabinon. Kaj fine li komparis ambaŭ, la skulptaĵon kaj la modelon. Tiam en lia koro naskiĝis maltrankvilo kaj ĝi pli kaj pli grandiĝis.

Kompare al la modelo, lia laboraĵo aspektis pli kaj pli monotona. Li ne povis klare vidi, de kie tio devenas. Tial silente li komparadis la modelon kun la laboraĵo kaj li sentis kreskantan malpaciecon. Kial li ne povas solvi tiun ĉi enigmon, li pensis.

La juna modelknabino adoris la skulptiston. Ŝi miris ke ŝia korpo reaperis en tiel belega skulptaĵo. Ŝi antaŭe servis kelkajn skulptistojn kaj pentristojn kiel modelo. Sed kiam ŝi vidis skulptaĵojn aŭ pentraĵojn de ili faritajn, ŝi ne povis ne ĵeti blasfeman vorton al sia propra korpo.

Iufoje ĝi estis nenio alia ol maso de karno, iufoje ĝi estis laŭlitere malgrandioza, aliffoje sango ne cirkulis en ĝi. Tamen ĉiu el ili similis al ŝi, kaj ŝi neniel povis trovi en ili aliulon krom ŝi. Sed kiam ŝi vidis la laboradon de tiu maljuna skulptisto, ŝia korpo heliĝis kaj viviĝis. La juneco, beleco, kaj gracieco, kiujn ŝi mem ne konis antaŭe, elfluis el ŝia korpo. Kiel malegale sentiĝas la modelo laŭ la artistoj! — ŝi pensis. Kaj ŝi atendis

〔老彫刻家の道德心〕——武者小路實篤

【註】skulpt'isto 彫刻家。model'knab'ino モデル娘 (modelo だけでモデルですが knabino たる事を示すために)。labor'aĵo 作品 (こゝでは skulpt'aĵo 即ち彫刻です)。ek'rid'et'is ほゝえむ。ŝajne 外見上(らしい)。kontent'eco 満足。iom post iom だんだん。ne'rifuz'ebila 拒否できぬ。sam'tempe 同時に。inverse 逆

に。nun'foja 今度の。dungi やさふ。ĉi'foje 今度。rav'ita (美に)うたれた。perfekt'eco 完全性。formi 形づくる。kun'lig'iĝo de kurb'linioj 曲線のむすびつき。ne'atent'inda 一寸した。kavoj kaj el'staroj 凹凸。sen'lima 無限の。el'naĝ'igi 流れださす。graci'eco 優しさ。ne'ordinara 特別の。tut'aĵo 全體。la unuan fojon en sia vivo 生れて初めて。tra'rigardi

la elfariĝon de sia statuo kun la revo, ke ŝia korpo montros perfektan belecon kaj allogos multajn homojn. La kontenteco de virino, kiu mem konsciis sian belecon, ekokupis ŝian koron.

La skulptisto metis sian manon sur la dorson de la skulptaĵo kaj gustumis la palpan senton sur la manplato. Poste li tuŝis per la mano la dorson de l' modelknabino tute sindeteneme. Ambaŭ la skulptisto kaj la modelo tute silentis. Li sin tenis kvazaŭ li tuŝus ion tre sanktan.

La modelknabino sentis ĉe sia dorso grandan manplaton kviete surmetata. La muskola moviĝo de lia mano al ŝi sentiĝis, kvankam tio estis tre malforta. Jam per siaj okuloj la maljuna skulptisto ne povis gustumi la misteron de l' korpo de modelo, tial nun li provis trovi ĝin per la palpa sento de sia manplato.

Preskaŭ unu minuton la skulptisto tenis sian manon sur la dorso de la modelo. Poste li denove metis la manon sulkoplenan sur la skulptaĵon. Ion sentinte, nevideble malgrandan pecon da argilo li deprenis de iu parto de l' skulptaĵo, kaj aldonis ĝin al alia parto. Kaj ankoraŭfoje li metis la manon sur la skulptaĵon kaj poste sur la dorso de la modelo. Rideto de tutkora ĝojo ekaperis ĉirkau liaj lipoj. Denove li metis la manon sur la skulptaĵon, kaj li deskrapis iometon da argilo. Kaj li komparis la modelon kun la skulptaĵo. Jen li premis per sia mano la maldekstran brakon de la skulptaĵo; kaj poste ankaŭ li tre malforte premis la saman parton de la modelo.

Iom post iom trankvilo foriĝis de la modelknabino. Malvarmo trakuris sian tutan korpon. Tamen la modelknabino, kiu respektas la laboron de la skulptisto, kviete ĉion toleris. Sed li ne povis ne senti la tremojn ĉe l' korpo de l' modelo.

Konfuzite, la maljuna skulptisto demetis la manon. Kaj li aliris al la skulptaĵo. Ĉi tiun fojon li nenion faris, nur tuŝante la maldekstran bruston de la skulptaĵo.

Tamen la modelknabino ekvidis liajn okulojn malsekigitaj kaj briletantaj. Kaj ŝia koro ankaŭ fariĝis malĝoja, ŝiaj okuloj eklarmis.

La skulptisto silente ekrigardis la modelon komparante kun sia laboraĵo, kaj faris iom da plibonigo al ĉiuj partoj de l' skulptaĵo. Sed li ne tuŝis plu la korpon de la modelo. Ja li treege volis tion fari; tamen li ne havis la kuraĝon piedpremi la puran junan koron.

Ŝi volis diri ke li tuŝu ŝin senĝene. Sed ŝi ankaŭ ne posedis kuraĝon eldiri tion.

一通りみる。kompari 比較す。kompare al 比して。aspekti みえる。monotona 単調な。de'veni 由來す。mal'pacienco 焦躁。enigmo 謎。adori 崇拜す。re'aperi 再現す。blasfema 冒瀆的の。nenio alia ol ~ ~ にすぎない。maso 塊。karno 肉。cirkuli 循環す。al'ulo 他の人。hel'igi 明るくなる。viviĝi 生々す。el'flui 流れでる。mal'egale 不同に。el'far'igo

完成。statuo 像。revo 夢想。al'logi 誘ふ。konscii 意識する。ek'ekupi 占める。gust'umi 味ふ。palpa sento 觸感。man'plato 掌。sin'de'ten'eme 遠慮勝に。sur'met'ata 上へおかれた。muskola 筋肉の。mov'igo 動き。provi 試む。de'skrapi むしりさる。argilo 粘土。for'igi 去る。toleri 耐える。mal'sek'ig'itaj 濕へる。ek'larmi 落涙す。malvarmumo 感冒。

Li finis la laboron kaj dankis la modelon.

La modelo lin demandis "Ĉu mi venu ankaŭ morgaŭ?"

"Ni ripozu por kelke da tempo," respondis li post iom da medito.

Por daŭrigi la laboron pluen, li bone sciis, por plibonigi la skulptaĵon li jam ne havas rimedojn krom palpa sento de sia manplato. Sajnis al li, ke tio ne estas permesata; eĉ se tio estus permesata, li devis dubi, ĉu la korpo de l' junulino tiam povas resti sankta figuro.

Baldaŭ li mortis kaŭze de malgrava malvarmumo. Du-tri jardekojn poste la posedanto de tiu skulptaĵo okaze mankarexis ĝian dorson. Li estis genia skulptisto ankoraŭ juna. Neatendite larmoj plenigis liajn okulojn. Mistera kaj viviga emocio lin inspiris. Senhezite li tuŝis aliajn partojn. Sed tie ne troviĝis tio, kion li serĉis. Li ree tuŝis la dorson, ĉar li dubis, ĉu la antaŭa sento ne estis iluzio. Sed la alpalpeco de la dorso, tute kiel antaŭe, tiel mirigis kaj ĝojigis lin, ke li pensis, ĉu tia estas la Eternulino.

Kia talenta artisto la verkinto estus, se tiu ĉi sento elfluus ankaŭ el aliaj partoj — tiel li pensis kaj elkore bedaŭris ke la talento de tiu skulptisto ne povis atingi ĝis tia grado.

La moralecon kaj kompatemon al la virgulino de l' verkinto la juna skulptisto ne povis senti.

jar'deko 十年(一昔)。man'karesi 手で撫でる。
genia 天才的。emocio 感動。inspiri 靈感を興
ふ。sen'hezite 直ちに。iluzio 幻覺。al'palp'eco

觸れた感じ。Etern'ul'ino 永遠女性。talenta
才能ある。verk'into 作った人。grado 程度。
virg'ul'ino 處女。

BONVENON AL AMUNSEN

de la redakcio de l' ĵurnalo "Hoĉi-ŝimbun"
libere tradukis el japana lingvo JUNKO.

北斗輝き黎明きたる

おゝ北方の偉人

アムンゼンきたる

彼ぞ極地の空を渡れる

おゝ北斗のごとくに

たかくもかゞやき

南北の極すでにきはめて

おゝこの人きたれり

わが日の本に

われらの世紀のいける寶ぞ

おゝうたひて迎へん

アムンゼンきたる

Sub la stelo polusa
Jam tagiĝo eklumas!
Venas norda heroo,
Li Amunsen sin nomas.

Sur la norda poluso
Li ĉielon trairis!
Alte Norge Flugante
Neĝan nubon disŝiris!

Li jam ambaŭ polusojn
Brave, brave esploris!
Nian landon nun venas,
Ni elkore lin gloras!

Li ja estas trezor' de
L' mond' en nia jarcento!
Bonvenigas konkorde
Lin ni ĝoja kun kanto.

EĤO KAJ REEĤO

Ĉiuj, kiuj volas publikigi sian opinion al la tutmonda samideanaro, sin turnu al tiu ĉi rubriko unupaĝa. La redakcio informas gravajn okazintaĵojn en japana Esperanta rondo al tutmonda kolegaro. La redakcio rezervas la rajton mallongigi trolongajn artikolojn. (匿名ヲ許サズ)

Traduku nuntempan literaturon!

Estas por ni, esperantistoj, granda ĝojo kaj ĉiama fiero ke ni povas ĝui pere de nia kara lingvo literaturojn de preskaŭ ĉiuj nacioj en la mondo. En ĉi tiu punkto ni superas eĉ plej grandan poligloton kiun iam havis la mondo!

Tamen, ĉi tie mi havas unu proponon pri kiu mi deziras konsulti la grandan samideanaron de l' tuta mondo. Kiel vi bone scias, ni havas jam sufiĉe multajn tradukojn de klasikaj literaturoj sed tre malmultajn de nuntempaj literaturoj. La kialo ŝajnas esti ke oni renkontas malfacilaĵojn je la elektado de taŭgaj verkoj, t.e. tradukindaj de nuntempaj literaturoj. Tamen, mi kredas ke ĉiu nacio estas tre scivola pri nuntempa literaturo de aliaj, jam ne parolante pri ni, japanoj, kiuj estas devigataj atendi dum longa tempo por sciiĝi pri nuntempaj alilandaj literaturoj pro la specialeco de sia geografia situacio kaj precipe pro la lingva malfacileco. Tial se Esperanto povas esti fiera pri sia viveco, ĝi nepre devas enkonduki la nuntempan literaturon de l' tutmondo en sian teritorion. Krom tio, por diri la veron ni jam tro alkutimiĝis al Goethe, Schiller, Molière, Hugo, Shakespeare, Dickens, Gozol Tolstoj. Estas vero, ke la komprenado de pasinta literaturo estas tre utila por tiu de nuntempa, sed samtempe kun pli profunda bazo ni povas certigi, ke por kapti la veran figuron de la moviĝanta, spiranta, vivanta mondo nuntempa mi nepre necesas legi la nuntempan literaturon tutmondan. Tial mi elkore deziras al samideanaro de ĉiu nacio ke ili prezentu al la tutmondo esperantajn tradukojn de sia nuntempa literaturo, ĉar se tiel estos farite, ni povas esperi kun forta konvinko ke nia lingvo donos tre utilan oferon al la tutmonda kulturo.

Fine mi ankoraŭ deziras ke tradukantoj havu la bonecon aldoni al sia traduko tre

detalan kaj valoran enkondukon pri la aŭtoro kiun ili tradukis. (24. 6. 1927, N. Hiraoka)

Tremas mia koro je granda emocio!

*Pro la senfina paco de la mondo!
eterna beno de la homaro!
Ni uzu esperanton.*

Miaj plej karaj samideanoj,

La supreskribitaj frazoj estas la vortoj de amo elfluantaj tra mia buŝo el la fundo de mia brusto. Ĝi estas por mi la sola sanktskribo, kiun mi amante ĉiam ripetadas. Kiam mi ripetas ĉi tiujn vortojn, mi sentas ja mirindan forton enirantan en min, kiu plifortigas mian memkonscion kiel unu el homaranoj. Samtempe, ĝi estas ankaŭ mia preĝado kun profunda pieco, kiun mi ĉiutage oferadas al ĉiuj homaranoj.

Mi volas, per ĉi tiuj preĝvortoj mallongaj, sen timo sed brave, alkrii al ĉiuj, kiuj vivas sur nia terglobo. Tamen mia ekzisteco estas tre malgranda, eĉ neniam rimarkinda. Ĝi tre similas, al malgranda naĝherbo, vaganta sur la akvo de la vasta lago. Do kial mi kuraĝas alkrii spite de mia malgrandeco? Kial mi ne silentas? Ĉar io min ekscitas, kio havas tre grandan forton, kaj kies forteco estas neniam movebla per iu ajn alia forto. Kio estas tiu "io"? Tio estas, kompreneble, Esperantismo aŭ homaranismo, la spirito de nia!

Kvindek jaroj da homa vivo! Plena je pekoj! Jen malĝojoj kaj ĉagrenoj! Jen kordoloroj kaj suferoj! Jen malesperiĝoj kaj malamoj! Jen perfidoj kaj konfliktoj! Kaj jen! Stertoroj de agonio! Kiel multe da malbeloj kaj malbonoj oni trovas ĉirkaŭ si! Blovas vento abomene varmeta!

Solena estas la vojaĝo de homvivo! Ĉu oni povas, paŝante la vojon de la vojaĝo, vere kontraŭstari al tiuj pekoj, sen ia piema kredo, kiu al si vipadas? Tiu forto, kiu donas al ni la kredon, ja estas neniŭ, krom Esperantismo.

Esperantismo estas, ne sole por ni la nobla

ideo, la sankta preĝo, sed ja estas la granda idealo eĉ, aŭdu! eĉ atingebla, sed ne fantazia.

Ĉu oni povas pli bone vivi eĉ unu tagon, sen tia granda idealo, sen tia nobla ideo kaj sen tia piema preĝado? Ne! Neniam kaj

neniel! tute ne eble! Mi konfesas honeste, ke mi ankaŭ estas unu el savitoj de Esperanto. Kiel ĝojinde! Aŭskultu, la sonon de miaj korbatoj! Ĉu laŭte, ĉu mallaŭte, mia brusto ondadas, tremante je grandega emocio!

(Cutomu Suzuki)

★ ★ VERDA LETERO EL PROF. ASADA ★ ★

Mi havas la grandan plezuron publikigi leterojn, kiujn mi ricevis de Sinjoro Profesoro H. Asada, kiu ĝuadas verdan vojaĝon tra Eŭropo kune kun sia edzino. Laŭ lia letero li estas tro okupita por skribi aparte pri sia verda vojaĝo. Estas sufiĉe scii pri li dum la vojaĝo kaj pri la nuntempa stato de Esperanta movado en Eŭropo per liaj privataj leteroj, kiujn mi aperigos sinsekve tie ĉi kun lia permeso.—Ken Takahara (Nagasaki).

[1]

Survoje de Fusan al Keiĵo,
la 26an de Aprilo 27.

Kara samideano,

Mi kore dankas vin pro la telegramo, kiun mi ricevis en la ŝipo hodiaŭ frumatene. En Ŝimonoseki ni vane flirtigis verdajn standardojn, sed en Fusan kvankam frumatene kelkaj samideanoj venis bonvenigi nin kaj ili kondukis nin al la "Station Hotel", kie ni havis tekunsidon. Malfeliĉe mia letero adresita al sinjoro Aizo Hasegaŭa vaniĝis, ĉar li jam ne estas ĉi tie. Mi intencis sciigi al li, ke ni ŝanĝis la programon kaj ni ne restados pli longe, ol ni veturrigardos per aŭtomobilo. Pro la malesto de la ricevinto de mia letero oni kredis, ke ni noktiĝos tie ĉi. Fine nia intenco traviziti la urbon Fusan vaniĝis. Ni forlasis la urbon post dumunukora haltado tiea. En la momento de nia forveturo alvenis fotografisto kaj ni estis fotografitaj kune kun la tieaj samideanoj, kiuj estas jenaj: Sinjoroj Araki (kuracisto dermatologia), J. Hasegaŭa kaj U (koreano). Dum nia haltado ĉe la hotelo multaj ĵurnalistoj venis renkonte al ni kaj demandis fervore pri nia kara lingvo. Nia alveno almenaŭ taŭgos por propagandi la utilecon de Esperanto tie. Tri samideanoj nur malmulte komprenas la lingvon krom

S-ro Araki, kiu estas membro de U. E. A.

En Keiĵo sur la perono mi trovis inter kelkaj amikoj S-ron Oojama, kiu parolas Esperanton tre bone. Laŭ lia diro tie ĉi troviĝas malmulte da kompetentaj samideanoj, kvankam li jam gvidis kurson pli ol dudek fojojn por kursanoj pli ol sescent. Li bonvolis interparoli kun mi dum unu horo en la hotelo, kiu estas tre eleganta konstruaĵo kaj en kiu oni kutimas manĝi aŭdante ĉarman muzikon.

Ni pasigos du tagojn tie ĉi kaj aliros al Mukden.

Do ĝis baldaŭa reskribo.

Via Asada.

[2]

Dairen la 2an de Majo.

En Mukden je mia granda ĝojo mi trovis kelkdekajn samideanojn ĉe la medicina fakultato ĉi-tiea. Ili bonvolis nin bonvenigi ĉe la tekunsido. En Dairen unu samideano bonvolis veni al la stacidomo renkonte al ni, sed neniun mi trovis en Rjozun, kie neniam Esperanta grupo sin trovas. Tre malvigla estas la movado en Dairen kaj Rjozun. La ĝenerala stato de nia movado ĝis nun estas malesperiga, sed en pli malproksimaj landoj ni eble trovos kontentiĝon.

Via Asada.

[3]

Manĉuli, la 7an de Majo.

Kara samideano,

Tie ĉi mi ricevis tutkore bonvenigan gastaman zorgadon de S-ro Delegito Pavlov, tre bonkora maljunulo tamen fervora Esperantisto. Li kaj lia edzino afable regalis nin dufojojn kaj ĉiufoje kune kun multe da gesamideanoj aŭ geeminentuloj. Ni estas ĝisfunde dankemaj.

Via Asada.

l' malluma ĉambro ekŝajnas nun kvazaŭ sinmoveti pro la ruliĝanta fumo de oleo. La kanto ĵus mallaŭte aŭdiĝinta certe venis de unu el ambaŭ viroj en la kelo. Manikojn alten rukfaldinte, li energie akriĝas grandan hakilon per turnakrigilo. Apud li kuŝas alia hakilo forĵetita, kies blanka klingo de tempo al tempo briletas per la flirtanta flamo de l' lanterno. La alia viro kun krucigitaj brakoj staras apud li kaj rigardas la turniĝantan akrigilon. La lanterno lumigas unu flankon de lia vizaĝo elaperanta el plenbarbo, kaj ĝia lumigata parto vidiĝas kvazaŭ kaloto kun ŝlimo.

“Ricevante ĉiutage tiel multe da klientoj per ŝipo alsenditaj, ni ekzekutistoj ankaŭ havas prosperan okupon,” diras la viro kun barbo.

“Jes, jam sufiĉe da tasko akriĝi la hakilon,” respondas la kantinto, malgranda viro kun enfaliĝintaj okuloj kaj cindrokolora vizaĝo.

“Belan beston ni hieraŭ pereigis,” la viro kun barbo esprimas sian bedaŭron.

“Bela ja ŝi estis, tamen terure malmola estis la ostode ŝia kolo. La hakilo ĵen akiris rompiĝon ĉe klingo.” Tiel dirinte, li furioze ekturnas la akrigilon, kiu susurante disĵetas fajrerojn. Li nun laŭtavoĉe ekkantas:

“Malfacile tranĉeb'la la kolo virina,

Pro perdita la amo rompiĝas la klingo.”

En la mortosilenta ĉambro aŭdiĝas nur la susurado de l' akrigilo. La flirtanta flamo de l' lanterno lumigas

lian dekstran vangon, kiu ekŝajnas kvazaŭ fulgamaso surverŝita per cinabro.

“Kiu venos morgaŭ laŭ la vico?” Iom poste demandas la viro kun barbo.

“Tiu maljuna patrineto,” trankvila estas la respondo.

“La hararon jam grizan nigrigas la amo,

Kolorigas ĝin ruĝe hakilo per sango.”

La kanto daŭras, la akrigilo susuradas kaj la fajreroj disŝprucas.

“Ĉu la patrineto sola? Ĉu neniu alia?” denove demandas la viro kun barbo.

“Jes, kaj tiu...”

“Tiu mizerulino? Jam morgaŭ? Kompatinda!”

“Kompatinda, sed neniel alie!” blekas la alparolito, rigardante supren la nigran plafonon.

Subite malaperas la kelo, la ekzekutistoj kaj la lanterno, kaj mi trovis min stultanima en la mezo de l' Beauchamp-Turo. Kiam mi tamen reakiris mian konscion, mi unue ekrimarkis apud mi la knabeton, kiu antaŭ minutoj deziris doni panpecetojn al la korvoj. Tiu mistera virino akompanis lin ankaŭ kiel antaŭe.

“Jen hundoj desegnitaj!” krietas la knabo iom mirigita.

“Ili ne estas hundoj,” respondas la virino en la sama konvinka voĉo kiel antaŭe, kvazaŭ ŝi estus estinteco personigita. “Estas urso maldekstre, kaj leono dekstre. Ili reprezentas la familian blazonon de Dudley. Kiam mi aŭskultis ŝian klarigon, ŝi ekaperis al mi multe pli

enigma, ĉar mi ankaŭ ĝis tiam prenis ilin por hundoj aŭ porkoj. Mi ankaŭ nun komprenis, kial mi eksentis, kvazaŭ ŝi elparolis vorton "Dudley" tiel imprese, ke ĝi estus ŝia familia nomo. Haltigante spiron mi nun daŭre rigardadas ilin.

"Ĝi estas Johano Dudley,³⁰⁾ kiu engravuris tiun blazonon," la virino daŭrigas la klarigon kun la voĉo, kvazaŭ Johano estus ŝia propra frato. "Johano havis kvar fratojn,³¹⁾ kiuj estas tie klare montritaj per kvar specoj de l' floroj engravuritaj ĉirkaŭ la urso kaj leono." Mi efektive povis rimarki kvar specojn de floroj aŭ folioj nedifineblaj ĉirkaŭ la urso kaj leono kiel kadro ĉirkaŭ olepentraĵo. "Jen glanoj t. e. "acorns" reprezentas Ambroso'n, ĵen rozo Roberto'n. Malsupre vi vidas loniceron t. e. "honey suckle," kiu respondas al Henriko. Supre kaj maldekstre geranion, kiu respondas al G. . . ." Ŝi subite interrompas sian parolon kaj silentas. Ŝiaj koralkoloraj lipoj vibretis kvazaŭ galvanizitaj, tremetis kvazaŭ langpinto de serpento antaŭ muso. Iom poste ŝi komencas klare reciti la surskribon sub la blazono:

Kiu bone vidas tiujn bestojn,

Povas do facile scii, kial ili estas ja faritaj,

Kun la kadro ankaŭ ĵen, en kiu

Nomoj de kvar fratoj, kiu volas serĉi la kialon.³²⁾

Ŝi recitis la surskribon en tia voĉo, kvazaŭ ŝi de sia

³⁰⁾ John Dudley, naskita 1502 kaj ekzekutita 1553. ³¹⁾ Johano ne havis kvar fraĵojn sed filojn: Ambroso, Robert, Henry kaj Guilford.

infana tempo ĉiutage parkere ripetadis ĝin kiel sian ĉiutagan lecionon. La surskribo sur la muro estis tiel nelegebla, ke mi malgraŭ mia granda peno ne povis legi ĉe unu vorton. Ĉiam pli enigma ŝi ekaperis al mi.

Pro timo mi do preterpaŝis la virinon. Kiam mi nun eliris la ĉambron ĉirkaŭ angulon kun pafruo, mi ektrovis inter senorde skrapitaj desegnaĵoj kaj skribaĵoj nedifineblaj malgrandan sed korekte skribitan nomon "Jane"³³⁾. Mi vole-nevole nun devis halti antaŭ ĝi. Ĉu inter tiuj, kiuj iam legis historion de Anglujo, ekzistus iu, kiu ne konas la nomon "Jane Grey", kaj kiu ne verŝis larmojn de kompato sur ŝian malfeliĉon kaj ŝian mizeran morton? Jane propravole oferis sian 18-jaran vivon al la ĉsafodo pro la ambicio de siaj bopatro kaj edzo kaj ankoraŭ nun allogas la legantojn de l' historio al dolĉa malĝojo, kiel la parfumo nekonsumebla el la kaliko de rozo malĝentile dispremita. La anekdoto, ke ŝi mirigis Ascham,³⁴⁾ grandan instruitulon de sia tempo, per sia granda lerteco en la greka lingvo kaj per sia profunda kono en Plato, restos por ĉiam en ĉies memoro kiel bona materialo por ekkoni sian noblan personecon. Starante antaŭ "Jane" mi restis senmova,

32) Yow that these beasts do wel behold and se,
May deme with ease, wherefore here made they be,
With borders eke wher in

4 brothers' names who list to serche the grovnd.

33) Lady Jane Grey, edzino de Guilford Dudley, naskita 1537, ekzekutita 1554. 34) Roger Ascham, 1515-1568.

補語としての動詞

“Mi estas feliĉa akceptonte vin” といふ云ひ方はよいと思ひます。たとへ私自身は寧ろ一層單純な “mi estas feliĉa, ke mi vin akceptos” といふ云ひ方を擇びますにしても。“mi inklina ne faronte tion” と云ふ文はよくない様に思ひます；私なら “mi estas inklina ne fari tion.” と云ひます。
(La Revuo, 1908, Majo)

或種の動詞の二重の意味

貴君は或種の動詞は二重の意味をもつてゐるのでどんな風にそれを使用すべきかが精確に判らないと云はれます。即ち其れ等の語は二重の補足語 (komplemento) を必要とするが故に語の意味に従つて補足語のどちらが直接補足語で即ち目的格で表はすべきでありどちらが間接補足語で前置詞で表はすべきかが判らないのです。例へば “mi instruas mian infanon pri Esperanto” と云ふべきか “mi instruas Esperanton al mia infano” と云ふべきかが判らないのです。——所で私の考へでは不明瞭 (neklareco) と云ふ事は全く存在するものでなくそれはつまり人爲的 (arte) に造りあげたものにすぎないと思つてゐます。或る 에스ペランティストの會合で或人が “mi amas vin” と云ふべきか “mi vin amas” といふべきかと質問したので來會者達はこの問題について熱烈に且全く無駄に一晩中議論し合つたこの事です。併し之に對する答は全く簡單で「兩文とも正しい」と云ふ一語につきるのです。二重の補足語を持つてゐる動詞に就ての質問に對してもこの同じ答が與へらるべきだと考へます。上述の instruado についての二文のどちらか一つが正しいとし残の一つは悪いとせねばならないと強いる人がありませうか。其等兩文は共に全く我々の言語の法則に従つて規則的に造られたものであり兩方共全く意義明瞭で且等しく優美であります。従つて兩者とも全く正しいのであつて兩者のどちらを使用するかは使用者の個人的趣味や全文の文體上の要求によつて自由にえらんでよいと思ふ。即ち此文の能動を受動に変更したとしても “homo instruita” と “scienco instruita” の兩者の意味に誰も疑問を

いだかないのだから別に何等の不明瞭をも齎らすものではありません。尤もフランス語の “instruire” と “enseigner” とを是非とも區別したいといふ人々には前者の場合には “instrui” を後者には “lernigi” (即ち instrui iun pri io; lernigi ion al iu) を用ひても一向差支へがない。
(La Revuo, 1907, Aprilo)

動詞語尾の前の分詞接尾字

“estas amata” “estas amita” 等の代用としての “amatas” “amitas” 等の形は夫自身我々の言語に何等の破壊をも齎らしません。それでも言語委員會が之を是認しようとするならばそれを使用してもいいでせう併し若し單に作家が自分自身進んで眞先にこの形を用ひようとならば私はそれをお勧めできません。一般著作家がこの新しい形を採用できるのは單に “as” “is” 等が “estas” “estis” 等の意味をもつ場合のみに採用し得るわけであります。併しながら多分早晩は動詞の語尾が動詞 “esti” の意味を持つようになりませうがそれにしても今日迄はまだその意味はもつてゐないのです。
(La Revuo, 1907, Aprilo)

分詞接尾字の意義

若し接尾字附の語 “estanta” の代りに或る簡單な無接尾字の語 (例へば “nuna”) を用ひるならばその場合其の名詞形は勿論どうしても人を意味することは出来ない、それは單にその抽象物を意味し得るにすぎません。併し分詞接尾字は其れ自身或る具象的のもの (iu aŭ io, kiu ...as) に對する觀念を含んでゐる。従つて分詞接尾字を以て名詞化された動詞は唯具象物 (ulo 又は aĵo) のみを意味し得るのであります。而して最大多數の場合において分詞接尾字はそれ自身の意味によつて人 (ulo) を示すが故に「十分の原律 (principo de sufiĉo)」に従つて我々は絶えず之に接尾字 “ul” を附加することを要しないのです。而して單に我々が上述の接尾字によつて人 (ulo) を示さず物 (aĵo) を示したいと云ふ稀な場合に於てのみ接尾字を附加するのです。
(Oficiala Gazeto, IV, 1911, p. 1)

れるのです。それ故私は “ni loĝas en Londono ambaŭ en somero kaj en vintro” と云ふ文に於ける ambaŭ の様に接續詞的に用ひられる事は是認すべきでないと思へます。(この際は “kiel en somero, tiel ankaŭ en vintro” とか “ne nur en somero, sed ankaŭ en vintro” とか云ふ様にお勧めすべきだと思ふ)。私は嘗て屢々 “la ambaŭ” と云ふ形を用ひましたが今では冠詞をつけずに “ambaŭ” を用ひる方が論理的だと思へてゐます。(Oficiala Gazeto, IV; 1911, p. 221)

“multe da” と “multa”

“multe da laboro” 及び “multa laboro” の形は兩方とも等しく正しいのです。又 “mi konas tiom homojn” と “mi konas tiom da homoj” の兩方の云ひ方も亦等しく正しいのです。併し “mi konas tiom da homojn” と云ふのはよろしくない。何となればこの文に於ては “homoj” といふ形は “konas” と云ふ語にかゝつてゐるのでなく目的格を要求せない前置詞 “da” にかゝつてゐるのであるからよくないのです。(Oficiala Gazeto, IV, 1911, p. 221)

“multaj homoj” と “multe da homoj” との間には違ひがあります。即ち “multaj homoj” = diversaj homoj (ĉiu aparte 各人を個々別々に考ふ) であり、“multe da homoj” = granda nombro da homoj (kune 一緒に纏めて云ふ) である。(Esperantisto, 1893, p. 96)

“jam ne…” “ne… plu”

多くの場合これら兩方の云ひ表し方は共に等しく正しいと思ひます。而して第一のものが第二のものがどちらか一方のみを用ひよと云はればならぬといふ何等の理由も見つからないのです。何等の不便をも齎らさない場合に於て不必要に我々から自由を奪ふべき理由がありませうか。とはいへ兩方の云ひ表し方は必ずしも常に一方が他方の代用たり得るものではないのです。例へば “ne parolu plu” の代りに “jam ne parolu” と云ふ事はできません。“jam” や “ne” の如きかゝるしかと定義する事のできない語に對して全く精確な (preciza)

特殊の場合の不定法

我々が “mi vidis lin sana” (=“ke li estas sana”) と云ふ様に——それと同様に “mi vidis lin kuri” (=“ke li kuras”), “mi aŭdis lin paroli” (=“ke li parolas”) と云ふことができるかと私は考へます。併し “li faris ĉion sen ridi” 或は “li restis du tagojn sen manĝi” と云ふ云ひ方を用ひることはお勧めしたくない。動詞の前に前置詞を用ひることは單に我々がそうしないかと考へるを十分述べることはできないといふ絶対必要な場合だけに使用することを御勧めしたいのです。所で “sen ridi” や “sen manĝi” はその代りに “sen rido” “sen manĝo” とか或は “neniom ridante”, “nenion manĝante” 等と云ひかへることができるのです。 (La Revuo, 1907, Junio)

動詞の後の不定法

私は貴君の御質問の本體が十分に判りかれます。貴君は何か御尋ねになつたのではなく單に次のような御自分の御意見を御述べになつたやうに私には思はれます。即ちエスペラントに於ては不定法は單に直接補足語 (例へば “mi amas danci”) の形で用ひるか或は “por”, “antaŭ (ol)”, “anstataŭ” なる前置詞がついた間接補足語の形で用ひるべきであつて其他の或る前置詞と不定法とを併用する必要がある時には常に其の代りに分詞或は前置詞付きの名詞を用ひる (例へば “li foriris sen premi lian manon” と云はずに “ne preminte lian manon”, とか “sen premado de lia mano” とせねばならない) べきであること。此貴君の御意見は正しいと思ひます。 (La Revuo, 1908, Februaro)

副詞、副詞形

“ambaŭ”

“ambaŭ” は “ĉiuj du” を意味してゐます。即ち此語は我々が二人の人或は二つの物に就いて話す場合に於て “ĉiuj” の代りに用ひら

月刊 佛 教 雜誌

一部5錢 一年60錢 見本無代送呈
東京芝區三田慶應義塾佛教青年會發行
〔振替口座東京70764番〕

夏期講習 8月1日から13日迄初等
及中等科の 에스語講習
をします講師佐々城佑氏。規則書呈上。
東京市麴町區四番町九
エスペラント研究會

故東宮君の書狀お持の方へ

故東宮豐達君の書狀の中で 에스語の語
學問題にふれたものがありましたらまご
めてみたいと思ひますからぜひ拜借さし
ていたゞいて寫させていたゞきたいと存
じます。絶對責任を以て決して紛失する
様なことのない様取扱ひますから。

長野縣輕井澤舊道高林方
〔故東宮君遺稿整理擔當人〕横山末治郎

日本エスペラント學會事業部より

新しい緑星章 今度新たに背廣用（ボタンの孔へ挿入して少しもおちる心配
のない便利なもの）の緑星胸章（圓形七寶）を澤山作りしました。
ごしごし御注文下さい。價は從來の安全ピン止めと同様一個送料共30錢です。特に背
廣用希望の向はその旨申添へられたし。御申出なきものには安全ピンの方をおくる。
尙又特に銀臺七寶の上製も作成中です。（價五、六十錢見當）尙外に緑星のカウスボタ
ンも製作させてゐます（一圓五十錢見當）。

取次書目 次の二種の辭書は故東宮氏が生前獨逸より輸入されたばかりの書籍で
す。御遺族の御依頼に應じて取次いたします。兩方とも二十部程あり
ますから御入用の方は學會へ御注文下さい。

★Bennemann 氏著: **Esperanto-Handwörterbuch** の
II. Teil, Deutsch-Esperanto の部 一册定價 4.00 圓 書留送料
18 錢
（大さ3.5寸×5.5寸 455頁。クロース綴堅牢優美）

獨エス辭典として Christaller の辭典と共に最良のもの。本誌五月號 115 頁に本
辭典の recenzo がでゝゐますから御覽下さい。

★Degen u. Kötz 氏共著: **Hirts Esperanto-Taschen-
wörterbuch** （大さ3.5寸×5.5寸 117頁。堅表紙優美）定價 65 錢 送料4 錢
これはエザンバラのエス辭典に比すべきものでエス獨、獨エス兩方があつて體
裁もよく印刷も鮮明である。

★大正十五年度 Revuo Orienta 合本 定價送料共 2 圓 60 錢

★大正十五年度 Revuo Orienta 總目錄（謄寫版刷）

御入用の方は 2 錢切手封入申込下さい差上ります。（百部しかありません）。

★新入會員を御勧誘下さい。新入會員へは「エスペラント初歩講座」
を贈呈します。（但し一年分會費前納の方へ）

★會費「前金切」の方は至急御拂込下さい。お拂込がなければ集金郵
便でいたゞきにあらります。

（集金は三圓——會費1年2.5月分と集金料）。退會の方は迅速に御申出下さい。

東京市牛込區 財團 日本エスペラント學會 振替口座
新小川町3の14 法人 東京 11325 番



無代進呈

★宣傳の『葉』
★宣傳の「チラシビラ」

（頒習會）
百枚以下無料（但送料卅枚毎に四錢）
百枚以上百枚毎に實費送料共六十五錢にて
三百枚以下無料（但送料百枚毎に二錢）
三百枚以上は百枚毎に實費送料共十錢にて
（街上展覽會等で配布すべきもの）
宛申
限るに

日本風景風俗エハガキ（四枚一組三色刷）（エス文）
（價廿錢送料二錢）（説明付）

緑星章（圓形七寶美麗）
（送料共三十錢）

（安全ピン止めとボタン孔へ挿入の二種あり）

緑星旗（紙）（十枚送料）
（製）（共十五錢）

半紙大原紙兩「綠色刷、左角四分の一は白地に緑の星、殘四分三は緑の地にエスペラントと白く抜ききたるもの。展覽會その他の際タコアシに使用して好適。十枚以下賣りません。但し見本希望の方には郵券五錢送れば二枚送る。

エスペラントの歌と其の譯

エスペラントの歌 La Espero, Sankta Luĉio, Vindoj de la bela
Dun, Ho Normandi, Printempo, Adiaŭ の六篇に和譯（高尾亮
雄氏譯）を附し註を付す。

★當會出版書籍はすべて直接當會宛前金にて注文に限り十部以上二割引（送料も當方負擔）★

エスペラント發音研究

（定價五十錢）
（送料二錢）
（發音上の疑問はすべて本書にて氷解）

エスペラントやさしい読み物

（特價二十錢）
（送料二錢）
（エス笑話二十二篇に懇切な譯と註を附す）

新撰エス和辭典

（定價七十五錢）
（送料二錢）
（語數一萬五千餘語、譯語正確、索出至便、附錄文法一覽）

エスペラント捷徑

（定價六錢）
（送料一錢）
（四六版百六十頁、ロース美本エス語、獨習書中の白眉）

エスペラント講習用書

（定價五十錢）
（送料四錢）
（一萬部賣切を機として表紙を堅紙にし背をグロースに堅牢にせり）

講習の際には！！

せひ當會發行の書籍を御利用下さい——本會出版物賣上の益金はすべて我が財團法人の宣傳資金として使用されます

東京市牛込區新小川町3の14（振替東京11325番）

財團法人 日本エスペラント學會

Ĉiaj varoj je originalaj fabrikiprezoj!
Eksperto kaj perado per

Esperanto Komercista Grupo Dresden N. Hauptstr. 38

Specialaĵoj: Bicikloj de Fabriko Sigurd,
Cassel kun trijara garantio! prezo de M.
gis M. Sanigpreparaĵoj de fabriko Bom-
bastus Werke, Freital Albumoj ĉiuspecaj
de fabriko Schöffels Albumfabri, Leipzig.
Radio aparatoj de fabriko Mende & Co.
Dresden.

POSTULU PROSPEKTOJN!

Internacia Scienca Asocio Esperantista

1. 會費普通年額 1 圓。贊助會費年 5 圓。
2. 會員へは Bulteno(會報)を隔月一回宛
頒布す。入會希望者は日本エスペラン
ト學會へ會費をそへ申込の事。

Internacia Radio-Revuo

誌代年額 2 圓(五月號本誌廣告參照)
日本エスペラント學會にて取次ぐ

Internacia Medicina Revuo

誌代年額 2 圓 50 錢。東京帝大解剖學教室
内西教授宛申込の事。

旭光社

エス書取次の本社は今回都
合により丸之内ビルダング
の出張店を閉鎖しました。併し本店(芝區
濱松町 3 の 1) でエス書を從來の如く取扱
つてゐます。省線濱松町驛より市電大門
停留所に向つてゆき左へ横の大通へ折れ
て約半町右側(市電氣局濱松町倉庫筋向
ひ)です。どうぞお暇の節おこし下さい。

日本エスペラント學會取次圖書 (前金でなければ絶 對に送本しません)

日本で出版のもの	定價	郵税
★ザメンホフ演説集 (エス文のみ)	0.70	4 錢
★夜の空の星の如く (上記演説和譯)	0.90	6 "
★我國に於ける 外國語問題とエス	0.60	4 "
★日本語エスペラ ント小辭典	(三高) 1.00	4 "
★新魔王(エス文)	0.30	2 "
★ブレーメンの音樂師	0.15	2 "
★王様の新しい御衣	0.15	2 "
★燈臺守	0.45	2 "
★海の娘	1.20	6 "
★心の片隅	0.50	2 "
★詩集花束	0.80	4 "
★力ル口	0.20	2 "

外國出版のもの(部數僅少 乞即時注文)	定價	郵税
★Sankta Biblio	3.60	18 錢
★有島武郎氏「宣言」 (Deklaracio) (故東宮豐達氏譯)	1.25	6 "
★Stranga idilio	0.50	4 "
★Lilio	1.20	6 "
★Karlo	0.45	2 "
★Servokapabla	0.85	6 "
★La Vendetta	0.80	6 "
★Manon Lescaut	1.15	6 "
★Kantaro Esperanta	0.90	6 "
★Signalo	0.40	2 "

(振替送金最も確實)

- ◆取次圖書は日本のものに限り十部以上一割引(但し送料は御負擔下さるべき事)
- ◆大賣捌店を介しての注文の際は取次圖書は取扱はず(大賣捌店へ割引せればならぬ
ため當學會の大損失をまねくから)

東京市牛込區 財團 振替口座
新小川町 3 の 14 法人 日本エスペラント學會 東京 11325 番

KORESPONDA FAKO.

掲載者は必ず返事を出されたい事。(返事を出されなくて先方から苦情がきた方は今後掲載お断り致します。)

★Japanujo:—S-ra Jukinori Oota, ĉe Nakasugakkō, Suwa-gun, Nagano-ken; dez. koresp. kun brazilaj kaj eŭropaj genistruistoj.

★Japanujo:—S-ro Joŝio Kita, ĉe Ogi-lernejo, Ogi-maĉi, Suzu-gun, Iŝikaŭa-ken; per IP. L. kĉl.

★Japanujo:—S-ro T. Urata, ĉe Micubiŝi Zōengō, Nagasaki; kĉl. L. IP. P. eltiraĵojn de ĉiuland. ĵurnaloj.

★Japanujo:—S-ro Kioĵi Horiuĉi, studento, 8 Hatagaya, Tokio; kĉl. pri socioproblemo, historio, literaturo ktp.

★Japanujo:—S-ro S. Ŝimazu, laboristo, ĉe S-ro Kenmocu, 1074 Togoŝi Hiracuka-maĉi, apud Tokio; P. I. L.

★Japanujo:—S-ro Ŝozo Joŝida, 13 4-ĉome, Kitakjuhoĵi-maĉi, Higaŝi-ku, Osaka; kĉl.

★Japanujo:—S-ro Honami Okuda, instruisto, Hinukaŭa, Ena-gun, Gifu-ken, kĉl. L. I. P.

★Japanujo:—S-ro Kokiĉi Takahaŝi, 459, Zōŝiki, Nakano-maĉi apud Tokio; kun studentoj P. IP. nepre resp.

誌 雜 刊 月

◎國字問題解決の先驅◎

ローマ字世界

價 定

錢 十二部 一
圓 貳金 前年一

◎日本の國字となるべき名譽と運命をもつた日本式綴方によるローマ字の雜誌!
◎標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ字の雜誌を御覽なさい!
◎ローマ字の日本式綴方の論據、要點等に就ては郵券二錢を御送り下されば『ローマ字のすすめ』といふ小冊子を差上げます。

財團法人

日本のローマ字社

振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一

東京市本郷區駒込曙町十一番地

秋田雨雀・小坂狷二共著

模範エスペラント獨習

版 八 十 第 訂 改

西洋の教科書の焼きなほしではない。語系を異にする日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたものである。外國語の素養なき初學者も趣味のうちに習得が出来、既にエスペラントに熟達した人も他書に見出し得ぬ知識を求め得られる。(布装三八〇頁・定價二圓・書留送料十九錢)

ブリヴァ著・松崎克己譯

愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せる中にエスペラントのみひざり今日の隆盛あるは何故ぞ。それは此の語が優秀であるの幾多熱心の士が崇高なるエスペラント主義、即ち人類主義に感激し、身をすて、普及に努力し、努力しつゝあるからである。人類主義の教科書たる本書二〇〇頁を讀むはエスペラント學習者の義務である。(定價金一圓・書留送料十三錢)

京 東 座 口 替 振
番 九 八 八 二 四

閣

文

叢

區 込 牛 市 京 東
目 丁 二 町 樂 神

エスぺラント運動は協力にあり

★日本エスぺラント學會地方支部所在地其他
各地の地方會を御紹介したいが紙面狹隘のため
學會地方支部のみ掲載

★横濱支部

横濱市本町6の74 永島方

★高崎支部

高崎市東京鐵道局高崎檢車所内

★仙臺支部

仙臺市鐵砲町153 宮城園方

★京都支部

京都市寺町夷川カニヤ書店內

★綾部支部

京都府綾部町天聲社内

★大阪支部

大阪市西成區鶴見橋通1の254 米田方

★福岡支部

福岡市大名町3の105 江口方

★長崎支部

長崎市銀屋町56

其他學會と聯絡ある地方會澤山あり。地方會の所在地知りたい
時は學會へお問合せの事。

日本エスぺラント學會出版書籍取次販賣店

我「日本エス學會」の發行書籍は次の書店で取次いで販賣して
をります。勿論東京堂東海堂北隆館大東館等の大賣捌店でもど
りつぎますから全國著名各書店では取次いでくれますが何分迅
速にはゆきませんが下記の書店では常に多少のエス書はどの
へてあり且速迅に取次いでくれます。何卒御利用下さい。

★東京市

神田區表神保町3

東京堂小賣部

★大阪市

西區鞠上通1の31

福音社書店

〔電話土佐堀 1669, 3186 番〕

★京都市

寺町夷川

カニヤ書店

★福岡市

大名町81

原田綠星堂

★弘前市

上手町122

神書店

★神戸市

平野神田町505

豐榮堂書房

★高岡市

中川(公園入口)

谷村書店

★津市

立町22

太田書店

朝鮮時論

月刊

一年分 五圓五十錢
半年分 二圓八十錢
定價一部 五十錢

本誌の使命は

朝鮮民衆の輿論と文藝の紹介

内鮮兩民族の民衆を基調とする民衆の共存共榮

京城府平洞 25

發行所 朝鮮時論社

主筆 大山時雄氏

我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財団法人 日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】 【振替口座東京 11325 番】

◆すべての運動は大衆の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時だ。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大衆の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。

◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。(會員は法規上維持員とよぶ)

- 目 的** エスペラントの普及・研究・實用
- 事 業** (a) エスペラントに関する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要な認むる事業
- 會 費** (a) 普通會員 年額2圓40錢 (b) 贊助會員 年額5圓
(c) 特別會員 年額10圓以上 (d) 終身會員 一時金100圓
- 入會手續** 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。
(振替送金最も安全)
- 會 員 の 典 特** 1. 毎月研究雜誌“La Revuo Orienta”の配布をうく
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「榮」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接御問合せ下さい

役 員 名 簿 (五十音順)

理事長	理 學 博 士	中村 精 男	理 事	帝大教授醫學博士	西 成 甫
理 事		上野 孝 男	同 同	慶大教授醫學博士	美野田 琢磨
同 同	元鐵道省運輸局長	種 田 虎 雄	同 同	東京朝日新聞顧問	望月 周三郎
同 同	東京女子大學教授	河 崎 な つ	同 同		柳 田 國 男
同 同	中央大學教授	川原次吉郎	同 同		大 井 學
同 同		何 盛 三	監 事	高層氣象臺長	三 石 五 六
同 同	帝大教授文學博士	黒 板 勝 美	同 同	神奈川縣立農業學校長	大石和三郎
同 同	政治教育會會長	小林鐵太郎	同 同		清水勝雄
同 同	政修大學教授	高楠順次郎	同 同		木 崎 宏
同 同	帝大名譽教授		同 同	帝大教授	穂 積 重 遠
同 同	帝文		同 同	法學博士	三 島 章 道
同 同	學 博 士		同 同	子	

發行所 財団法人 日本エス・ペラント學會 東京市牛込區新小川町三ノ十四			印刷所 株式會社一匡印刷所 東京市神田區西小川町二ノ五			印刷人 高見澤保芳 東京市神田區西小川町二ノ五			編輯兼 發行人 大井學 東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			料 ◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					告 12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				廣 全頁 半頁 四半頁		口座番號 本會振替 會計用 基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行 昭和二年六月二十五日印刷			◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお断り ◆特別會員の廣告は二割引					12回 11回 10回 9回 8回 7回 6回 5回 4回 3回 2回 1回				全頁 半頁 四半頁		基本金専用東京三〇八番 一般(長野三二八番 東京一三三五番)		(郵税共) 本誌購讀料	
東京市牛込區新小川町三ノ十四			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市神田區西小川町二ノ五			東京市牛込區新小川町三ノ十四			昭和二年七月一日發行																	